

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第51集)

寺界道遺跡・旦棕遺跡発掘調査概報

2001

宇治市教育委員会



序

本書は、民間開発事業にともなって実施した寺界道遺跡と旦棕遺跡の発掘調査の概要報告です。

寺界道遺跡では、縄文時代の土器棺、古墳時代の土壇墓や飛鳥時代の竪穴式住居跡などが発見され、寺界道遺跡の範囲や構造を知る上で重要な資料を得ることができました。

旦棕遺跡では、小規模な調査であったものの、大久保環濠集落を明らかにする手がかりが得られました。

本書が多くの方の目にとまり、広く宇治の歴史を知る機会となり、文化財保護に役立つことを願うものであります。

最後になりましたが、調査にご協力を頂いた敷島住宅株式会社、やましる健康医療生活協同組合の方々をはじめ、調査期間中にご指導・ご助力を賜りました関係各位に対して心よりお礼申し上げます。

平成13年3月

宇治市教育委員会

教育長 谷口道夫

例 言

1. 本書は、平成11・12年度に宇治市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。
2. 本書で使用する方位は、寺界道遺跡は座標北、旦棕遺跡は磁北である。
3. 本発掘事業に関する調査体制は以下のとおりである。

発掘主体者	宇治市教育委員会		
発掘責任者	宇治市教育委員会	教 育 長	谷 口 道 夫
発掘担当者	同	歴史資料館文化財保護係	荒 川 史
発掘事務局	同	参事兼歴史資料館長	源 城 政 好
	同	歴史資料館主幹	吉 水 利 明
	同	歴史資料館館長補佐	岡 井 毅 芳
調査参加者	足立千春・新井朋哉・今治洋子・岡本衣絵・岡本智子・小谷沙代・北沢英子・久保千恵子 志村みどり・竹田涼子・坪井啓子・中井淳史・西田倫子・畑 陽子・黄 基玉・水口典子 山下 睦・山中 繁・吉田稔善		
4. 本書に掲載する写真は、遺構写真を荒川が、遺物写真を寿福滋氏が、航空写真を株式会社アイシーが撮影した。
5. 本書の執筆・編集は荒川が担当した。

本 文 目 次

I 寺界道遺跡発掘調査概要

1. 位置と環境	1
2. 調査に至る経過と調査経過	4
3. 遺 構	6
4. 出土遺物	21
5. ま と め	30

II 旦棕遺跡発掘調査概要

1. はじめに	33
2. 調査の概要	34
3. ま と め	36

挿 図 目 次

I 寺界道遺跡発掘調査概要

第1図	調査地周辺の主要遺跡	2	第18図	SK701土器出土状態(東から)	16
第2図	調査地位置図	3	第19図	9トレンチ全景(西から)	16
第3図	トレンチ配置図	4	第20図	9トレンチ平面実測図	17
第4図	調査地全景	5	第21図	SK901縄文土器出土状況	18
第5図	12・8トレンチ断面図	7	第22図	11・10トレンチ実測図	19
第6図	1トレンチ実測図	8	第23図	10トレンチ完掘状況(南から)	20
第7図	1トレンチ北部(南から)	8	第24図	11トレンチ完掘状況(南から)	20
第8図	5-1トレンチ平面実測図	9	第25図	縄文土器実測図	21
第9図	7トレンチ平面実測図	9	第26図	縄文・弥生土器	22
第10図	SH501実測図	10	第27図	SK701出土遺物実測図	23
第11図	5-2トレンチ実測図	11	第28図	SK701出土遺物(1)	24
第12図	SH501(南から)	12	第29図	SK701出土遺物(2)	25
第13図	5-2トレンチ(北から)	12	第30図	SH501出土遺物実測図	26
第14図	SK702縄文土器出土状況	13	第31図	SH501出土遺物	27
第15図	SK701実測図	14	第32図	その他の出土遺物実測図	28
第16図	7トレンチ完掘状況(東から)	15	第33図	その他の出土遺物(1)	29
第17図	SK701全景(南から)	15	第34図	その他の出土遺物(2)	29

II 旦椋遺跡発掘調査概要

第35図	調査地位置図	33	第38図	1トレンチ全景(東から)	35
第36図	トレンチ位置図	34	第39図	2トレンチ全景(東から)	35
第37図	1トレンチ北壁断面図	34	第40図	出土遺物実測図	36

I 寺界道遺跡発掘調査概要

1. 位置と環境

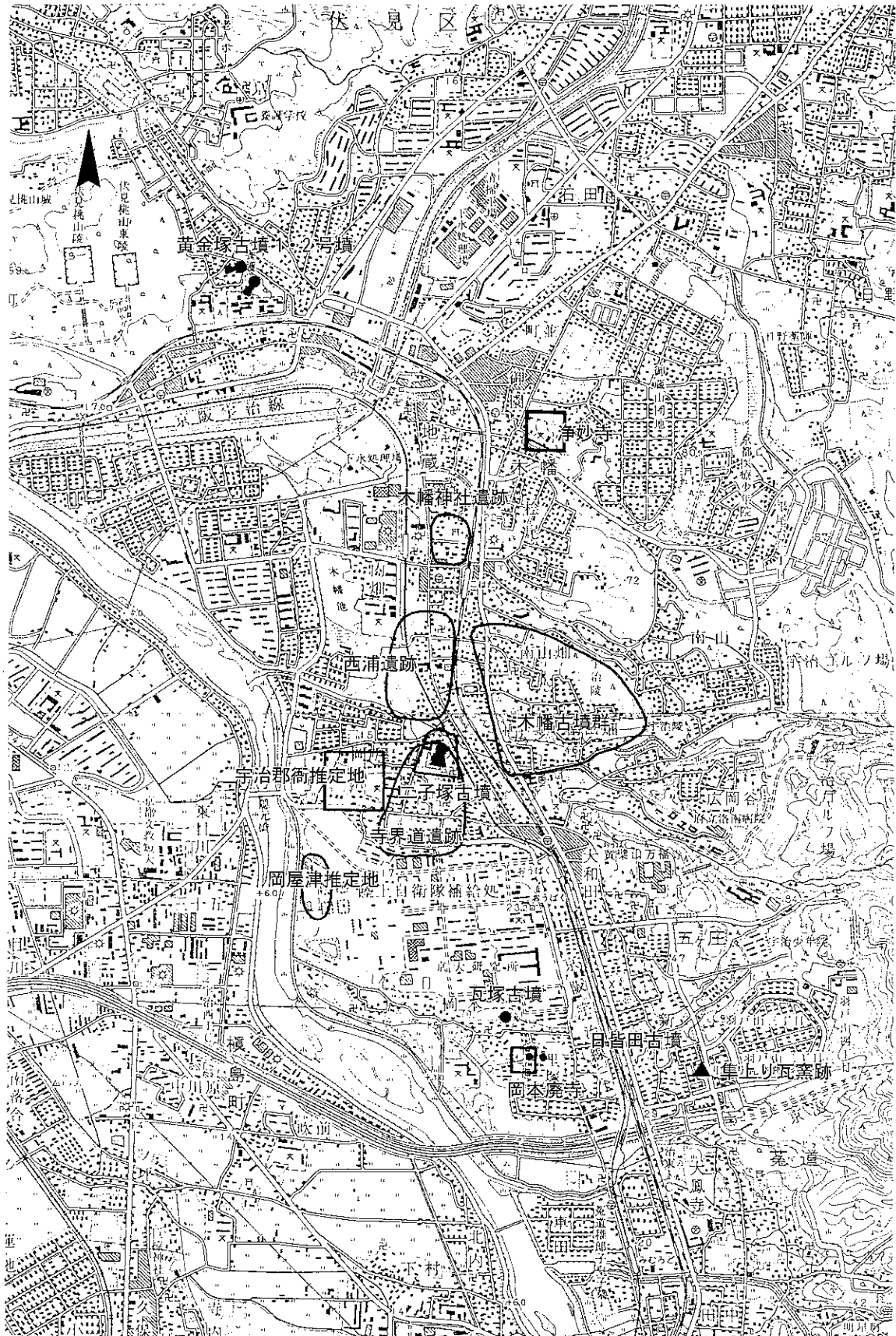
調査地のある宇治市五ヶ庄は、西と南には宇治川が流れ、北には木幡池などの低湿地が広がっており、宇治川東岸の中では最も巨椋池に突出したような地形となっている。これは本来、北は山科川によって、南は宇治川によって形成された段丘に起因しているものと思われる。この段丘面は、中央部が旧陸軍の宇治火薬製造所によって地形が改変されているため明確ではないが、北辺の岡屋付近と南辺の岡本付近がやや高くなっているように見受けられる。これはおそらく、北では弥陀次郎川の、南では新田川の扇状地性堆積物が段丘上を覆っているためと思われる。このことに起因してか、明治6年の『五ヶ庄村壬申地券地引絵図』によると、五ヶ庄中央にある宇治火薬製造所の跡地を引き継いだ、自衛隊及び京都大学宇治校舎付近にのみ条里地割がよく残っている。

五ヶ庄という地名は、この地が藤原氏の荘園であったことによるため、古代にまで遡るものではない。本来は北の木幡・六地蔵までを含んで木幡という地名で呼ばれていたものと思われる。このことは式内社許波多神社の旧社地が現在の五ヶ庄の地にあったことから窺える。

五ヶ庄地域における最も古い人々の足跡は、二子塚古墳墳丘から出土した黒曜石製のナイフ形石器である。^{註1)} 盛土中からの出土であるため遺跡の位置を特定できるものではないが、付近に旧石器時代の遺跡が存在することは間違いないものと思われる。

縄文時代では、二子塚古墳周堤下層から出土した後期の土器がある。また寺界道遺跡からは晩期の貯蔵穴が発見されている。^{註2)} 今回の調査地においても縄文時代晩期の遺構を検出しており、広範囲に遺跡が広がっていたものと考えられる。弥生時代では、五ヶ庄周辺では明確な遺跡は確認されていない。しかし西浦遺跡では弥生時代の可能性のある石器が出土しており、^{註3)} 付近に遺跡が存在する可能性は否定できない。

古墳時代では、前期古墳としては五ヶ庄地域南部の日皆田古墳があげられる。^{註4)} この古墳は低墳丘の方墳である。また集落では、木幡神社遺跡から布留式土器が出土している。中期には同じく南部地域に瓦塚古墳がある。^{註5)} 直径約30mの円墳で、礫槨を埋葬施設とする。地域の首長墓と呼べる古墳はこの瓦塚古墳が初めてのものとなるが、他の地域と比べ大型の首長墳は見られない。後期にはいると、五ヶ庄地域の様相は一変する。二子塚古墳の築造である。^{註6)} 二子塚古墳は6世紀初頭の全長112mの前方後円墳で、二段築成の古墳である。二重の周濠を持ち、埋葬施設は巨人な横穴式石室と考えられている。この古墳の築造を契機として、東部の丘陵には木幡古墳群が形成される。現在確認できる古墳は約120基であるが、削平され



第1図 調査地周辺の主要遺跡 (1:25,000)

た古墳も近年発見されており、総数は200基近くになるものと思われる。このころから集落遺跡も確認できるようになり、寺界道遺跡や西浦遺跡からは竪穴住居が検出されている。

飛鳥・奈良時代では、寺界道遺跡・西浦遺跡で掘立柱建物が検出されている。また、木幡神社遺跡では、溝状遺構から土器や瓦、鉄滓などが出土しており、付近に寺院などの遺跡があることが予想される。

平安時代にはいと、木幡には藤原氏の墳墓群が造営される。これに伴って、寛弘2年には藤原道長によって浄妙寺が建立される。また文献からはこの他に観音寺などの寺院が木幡周辺にあったことが知られるが、現在その正確な位置はわかっていない。また藤原氏の別業である富家殿も五ヶ庄付近にあったものと想定されているが、明確な場所はわかっていない。

これらの遺跡と共に五ヶ庄地域を特徴づけるものとして、岡屋津があげられる。鎌倉時代に書かれた『山科郷古図』には岡屋周辺に「郡里」・「大津」などの里名が書かれており、岡屋周辺に宇治郡衙があったものと想定されている。



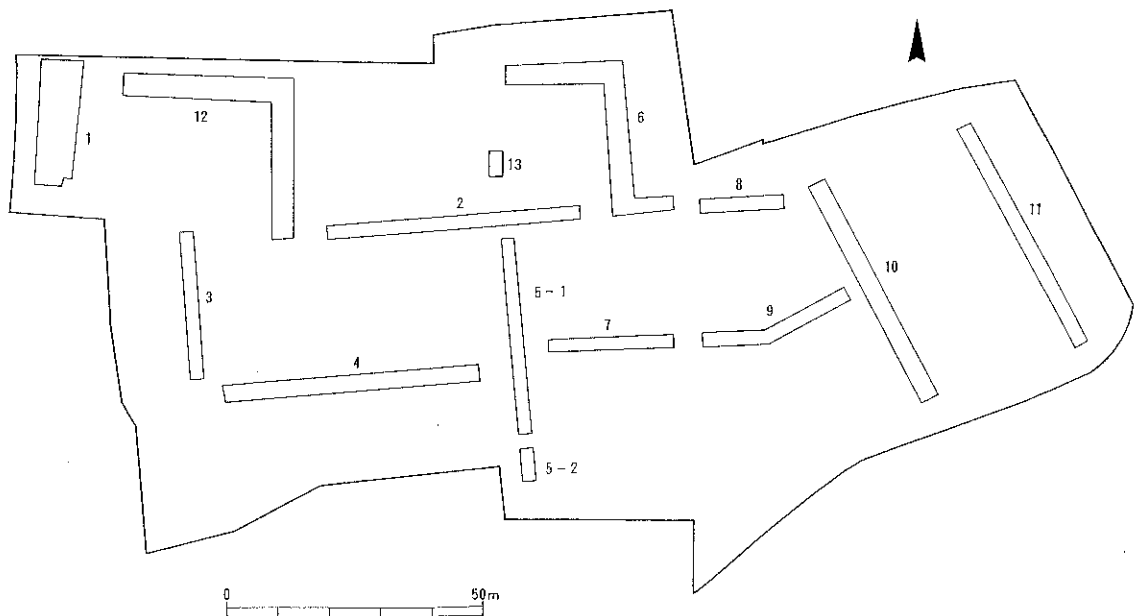
第2図 調査地位置図

2. 調査に至る経過と調査経過

平成11年5月28日付けで、敷島住宅株式会社より宇治市五ヶ庄大林7番地他における埋蔵文化財発掘の届が提出された。当地は周知の埋蔵文化財包蔵地である寺界道遺跡の範囲内であり、また全長112mの二子塚古墳の南側に隣接する地点であることから、重要遺構が存在することが予想された。しかし開発計画が1戸建て住宅の宅地造成であること、開発面積が17,000㎡に及ぶ大規模開発であることから、まず道路予定地において幅5mのトレンチを設定して、試掘調査を実施することとなった。

当地は開発前には茶園であり、茶樹が植えられていた状態だったため、茶樹の抜根が終了した平成11年9月20日から試掘調査を開始した。試掘調査は、調整池となる調査地北西部には20m×30m（1トレンチ）、街路となる部分に幅3mのトレンチを12ヶ所設定して行った。

重機掘削は調査地北西部から順次行っていったが、1トレンチでは旧流路を検出したため、調査面積を減らした。掘削の結果、調査地北部では弥陀次郎川と考えられる旧流路が東西に走り、中部から南部にかけてはこの影響を受けていないことが明らかになった。今回の調査でポイントになったのは、流路の影響を受けていない部分に広がるいわゆる黒ボクと呼ばれる黒色土層であった。周辺の調査から、遺構面は黒色土層にあることは予想されたが、過去の調査ではこの面での遺構検出が困難で、黒色土層下層で遺構を検出していた。しかし今回の調査では、黒色土層が厚く、下層まで掘り下げるとほとんど遺構が残らない状況であるこ



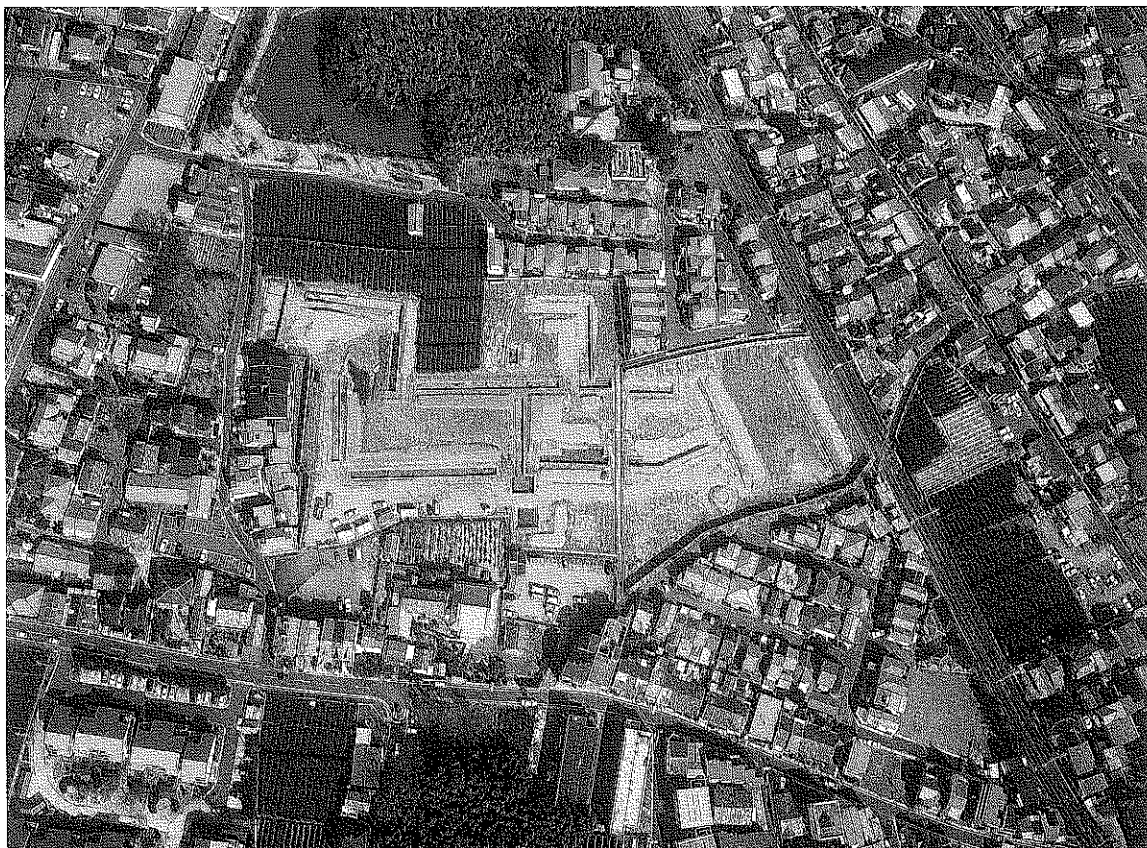
第3図 トレンチ配置図

とがわかった。そこで重機掘削は黒色土層上面、若しくはその上層にある奈良時代以降の包含層までとした。黒色土層中には、火山ガラスと思われるガラス質の物質が確認できたため、3トレンチ北端の土壌を採取して、土壌中火山ガラス抽出分析を行った。その結果、黒色土層中でアカホヤ火山灰の火山ガラスの濃集が認められ、この層がアカホヤ火山灰の降灰層を起源としたものであることがわかった。

また、調査地中央部にある里道を挟んだ2・5・6・7・8・9トレンチでは茶畑の土質改良のため、1.5m程の深さまで掘られており、トレンチによっては掘削が黒色土層下層にまで至っている状態であった。このため遺構の有無も確認できないトレンチもあった。また調査地東部のトレンチについては、弥陀次郎川の反乱による堆積層が厚く覆っており、遺構検出面が2m以上深くなることがわかった。

遺構は各トレンチにおいて検出したが、土壌墓を検出した7トレンチ、竪穴式住居を検出した5トレンチは随時拡張を行った。その他のトレンチについては遺構分布密度が低いことと、性格の特定できる遺構が少ないこと、宅地部分については遺構面までの掘削を行わないことが明らかになったため、拡張は行わず調査を終了することとした。

平成13年2月5日、地元町内会を対象にした現地説明会を実施し、平成12年2月24日全ての作業を終了した。調査面積は1,700㎡である。



第4図 調査地全景

3. 遺 構

A 基本層序

前項でも述べたように、本調査地は段丘上に扇状地性堆積物が覆った地形で、東から西に向かって緩やかに傾斜する。調査前の標高は、調査地東端で約28m、西端で約23mを測る。この扇状地を形成した弥陀次郎川は、現在は調査地の北方を流れているが、江戸時代前半には調査地の南辺を流れていたことが、古絵図などから読みとることができる。現在の流路に変更されたのは、江戸時代の中期以降のことらしい。江戸時代以前の流路はこれまで明らかではなかったが、調査の結果調査地北辺を、蛇行しながら西流していた可能性が高くなった。

調査地における土層は、旧流路の影響を受けている1・12・6トレンチと調査地東部の10・11トレンチ以外はほぼ同じ層位である。ここでは3トレンチの土層を示す(第5図)。基本的には①耕作土の下層に②礫を多量に含む褐色土層、そして③黄褐色土層、④黒色土層、⑤灰黄褐色土層となる。調査地西部ではほぼ同じ層序となるが、調査地中部では黒色土層の上層に茶褐色の奈良時代から中世の遺物を含む包含層が入る。遺構は、全て黒色土層上面で検出している。なお、この黒色土層には火山ガラスが含まれており、分析の結果アカホヤ火山灰であることが明らかになった。^{註7)}

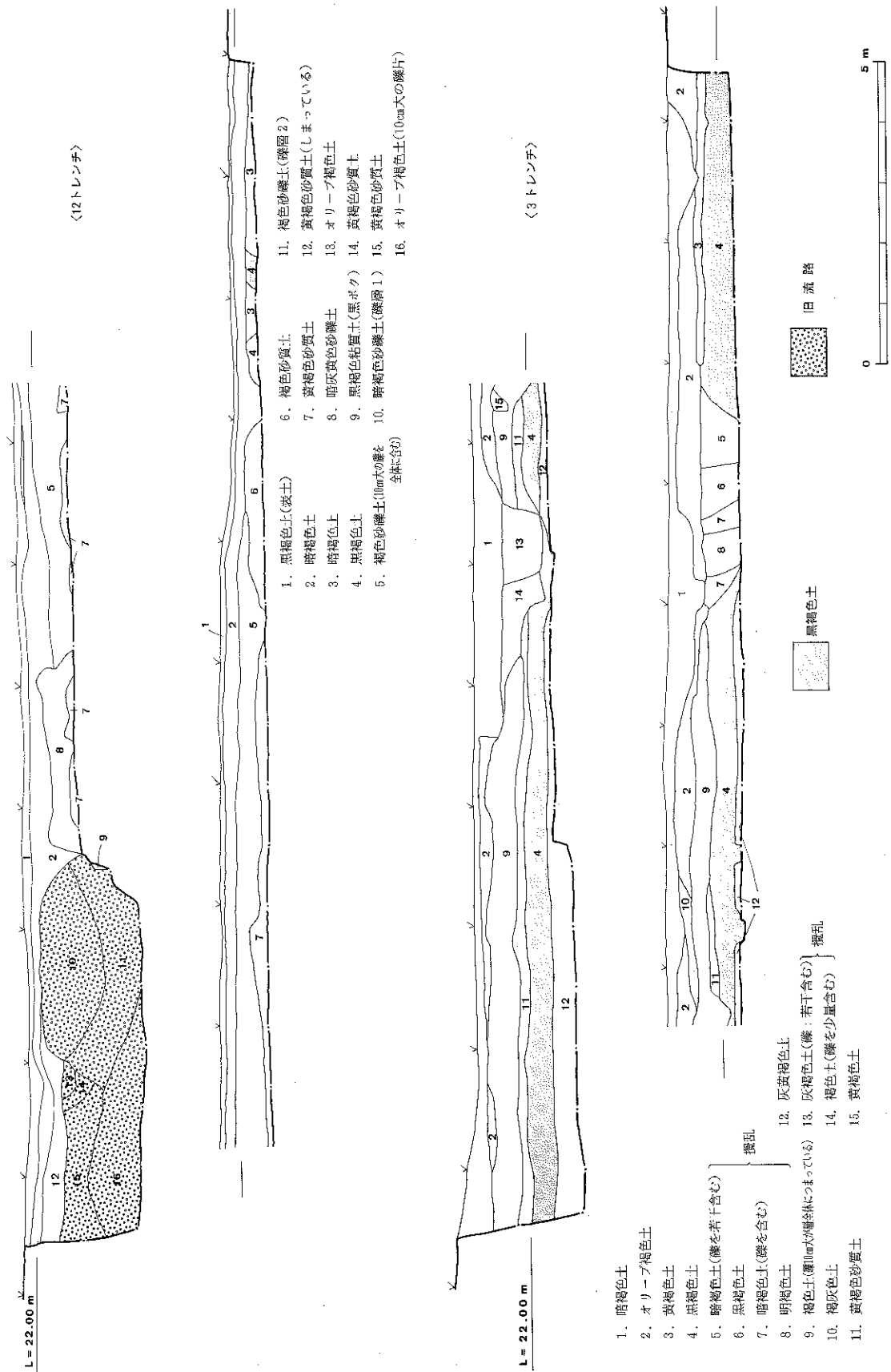
調査地北部の例として12トレンチの層序を示す(第5図)。ここではトレンチ北端に流路を検出しているが、流路によって黒色土層が削られている。また黒色土層の上層に堆積した砂礫層も、流路によって削られているため、一定期間流路が機能していたと考えられる。

調査地東部の10・11トレンチでは、明確な黒色土層は確認されない。自然環境によって浸食を受けたものか、人為的に削平を受けたものかは判断できない。

B 1トレンチの遺構(第6図)

1トレンチは、調査地北西部に設定したトレンチである。1トレンチでは、流路とその北側の岸を検出した。流路は調査地北辺を西流するが、1トレンチ付近で南に向きを変える。ここで注目したいのが、流路が南に向きを変える変換点付近の岸の斜面に礫の集積が認められることである。これらは石垣などのように積んだものではないが、他のトレンチで検出している流路南側の岸ではこのような集積は認められない。また、上層にも多量の礫が含まれるが、主体となる礫の大きさが異なるため、人為的に礫を集積させたものと判断した。

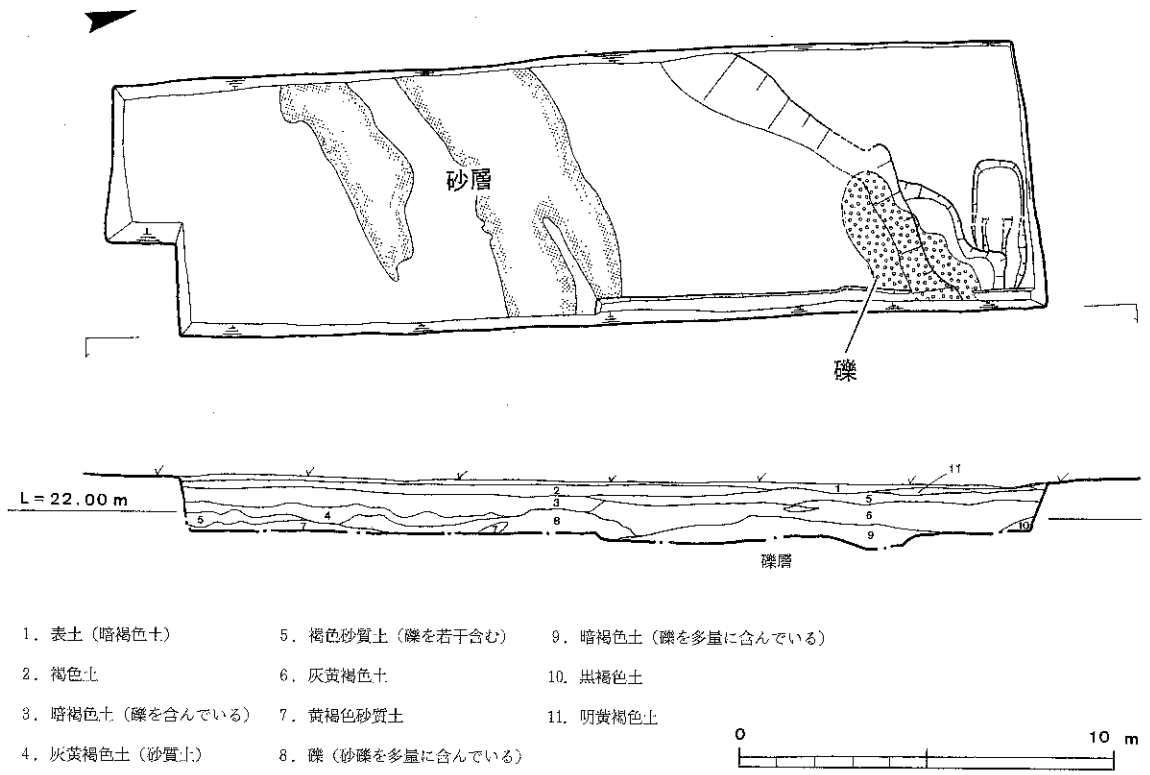
なぜこのように礫を集積させたかは明確ではないが、可能性としては弥陀次郎川が二子塚古墳の外濠に影響を与えないための護岸であったことも考えられる。



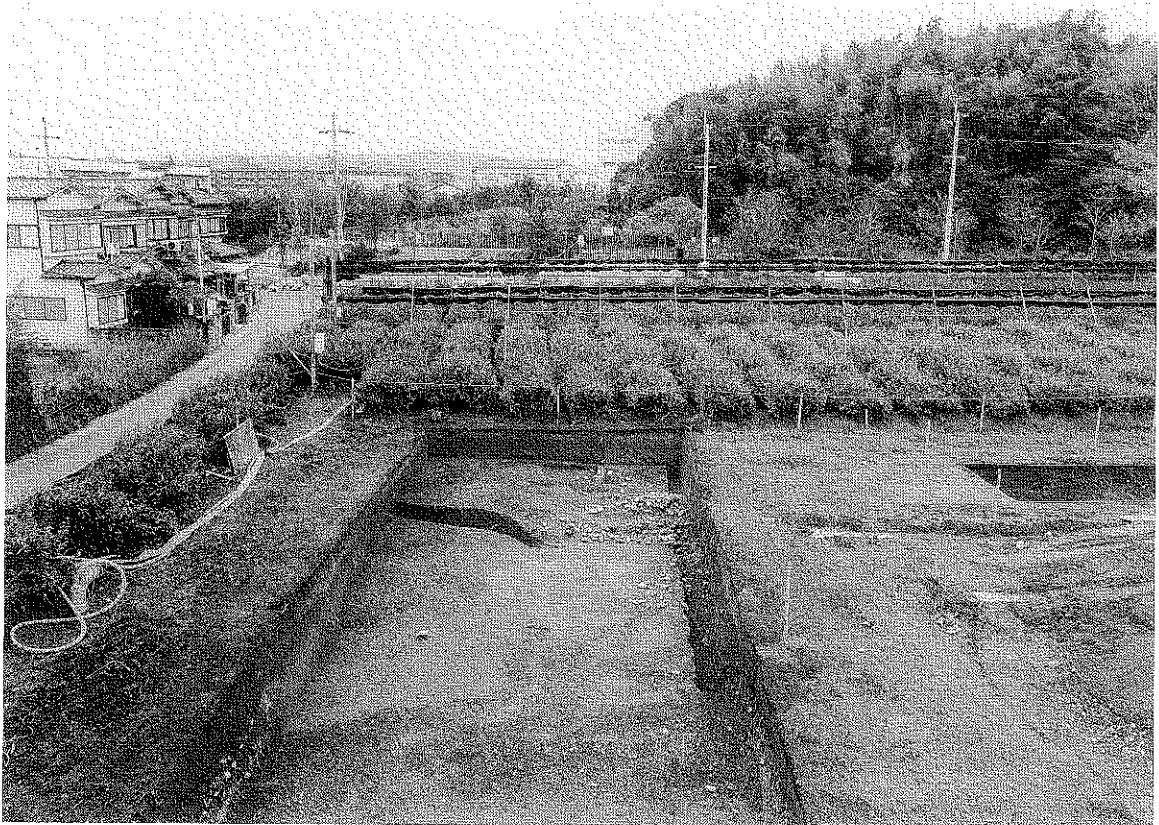
- 1. 黒褐色土(黄土)
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 黒褐色土
- 5. 褐色砂礫土(10cm²の礫を全体に含む)
- 6. 褐色砂質土
- 7. 黄褐色砂質土
- 8. 暗灰黄色砂礫土
- 9. 黒褐色粘質土(黒ボク)
- 10. 暗褐色砂礫土(礫隔1)
- 11. 褐色砂礫土(礫隔2)
- 12. 黄褐色砂質土(しまっている)
- 13. オリブ褐色土
- 14. 黄褐色砂質土
- 15. 黄褐色砂質土
- 16. オリブ褐色土(10cm²の礫片)

- 1. 暗褐色土
 - 2. オリブ褐色土
 - 3. 黄褐色土
 - 4. 黒褐色土
 - 5. 暗褐色土(礫を若干含む)
 - 6. 黒褐色土
 - 7. 暗褐色土(礫を含む)
 - 8. 暗褐色土
 - 9. 褐色土(礫10cm²が礫にしまっている)
 - 10. 褐灰色土
 - 11. 黄褐色砂質土
 - 12. 灰黄褐色土
 - 13. 灰褐色土(礫：若干含む)
 - 14. 褐色土(礫を少量含む)
 - 15. 黄褐色土
- 掘乱
- 掘乱

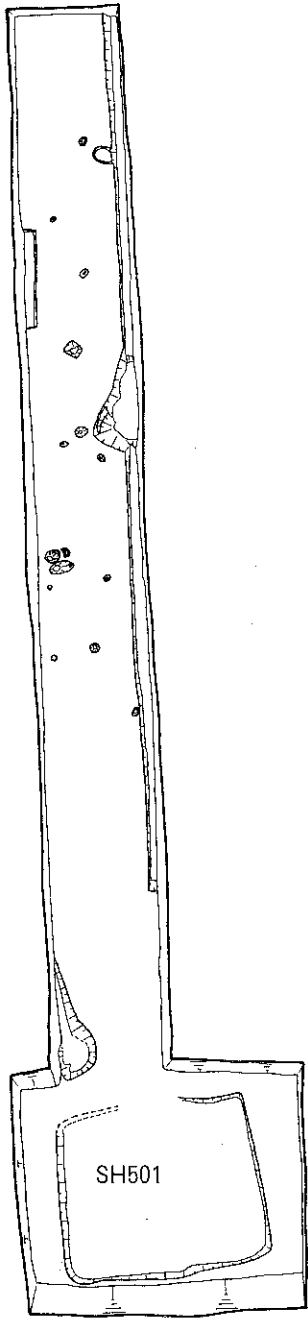
第5図 12・3トレンチ断面図



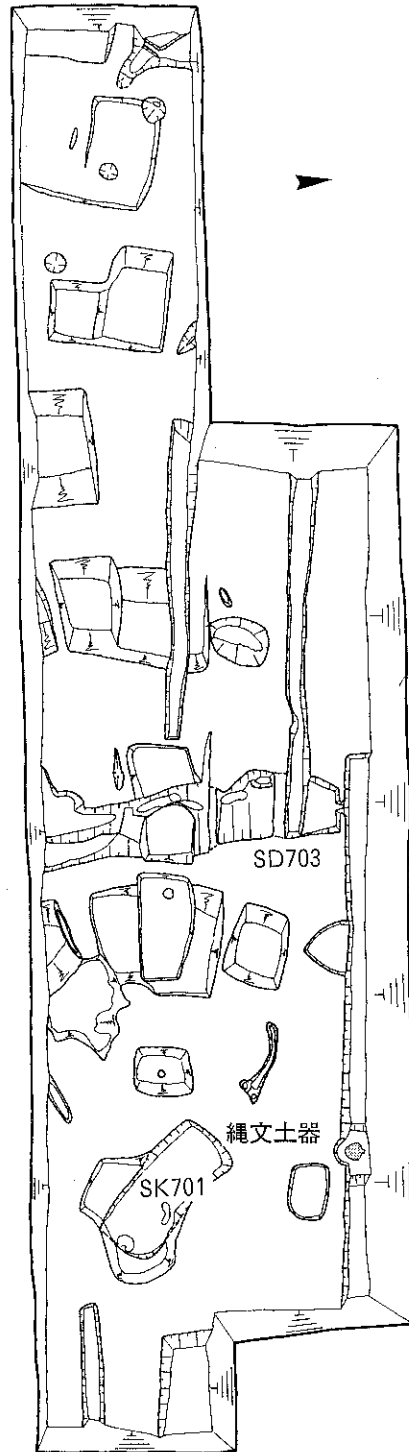
第6図 1トレンチ実測図



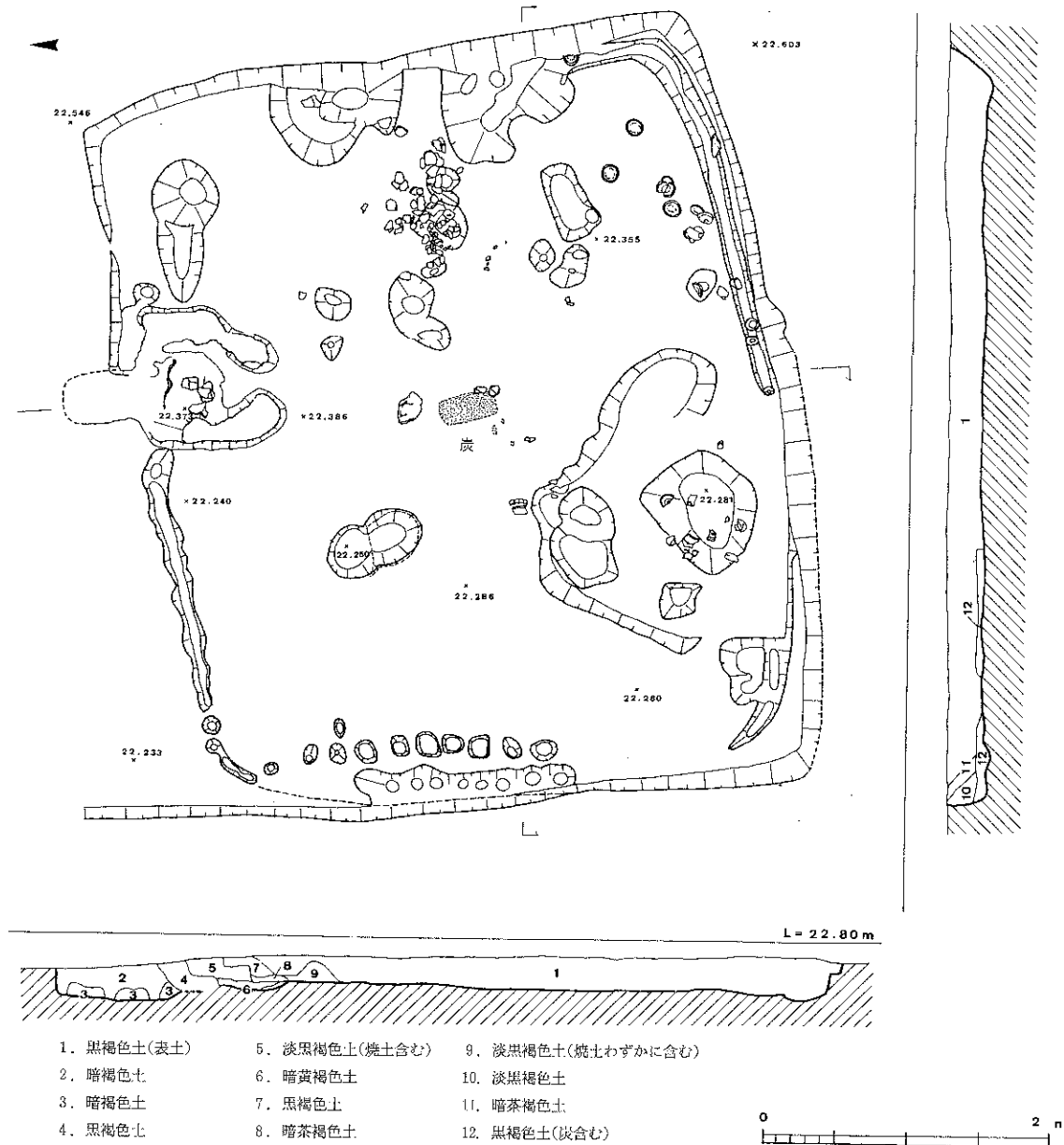
第7図 1トレンチ北部 (南から)



第8図 5-1トレンチ平面実測図



第9図 7トレンチ平面実測図

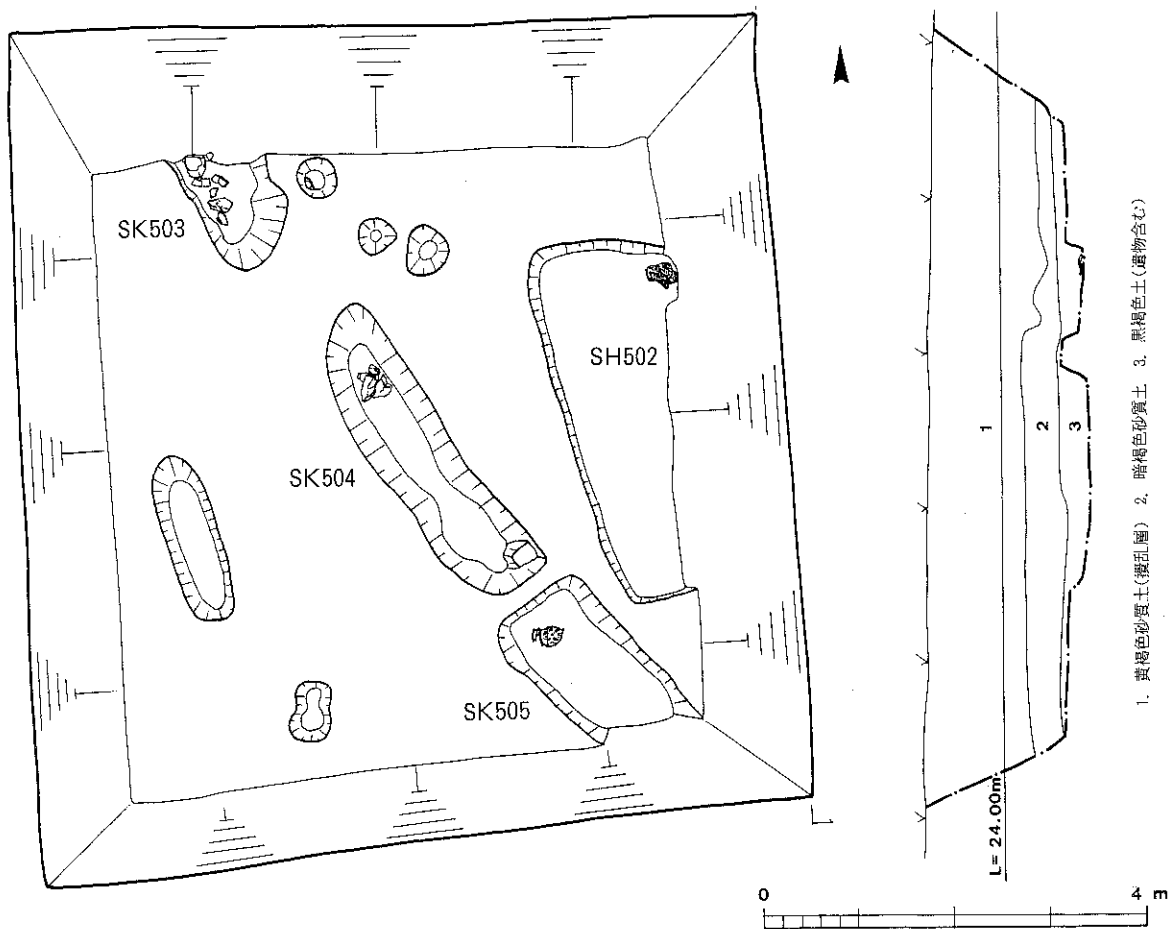


第10図 SH501実測図

C 5 トレンチの遺構 (第8図)

5 トレンチは、調査地中央部に設定した南北トレンチである。工事用通路を挟んで、北側を5-1 トレンチ、南側を5-2 トレンチとした。ここでは5-1 トレンチ南端で竪穴式住居を、5-2 トレンチでは竪穴式住居、溝、土壌などを検出した(第11図)。

竪穴式住居SH501 (第10図) 方形の竪穴式住居である。東西5 m、南北4.5 mを測る。残存高は、最も残りの良いところで0.3 mである。幅15 cmの壁溝が部分的に巡る。西辺の壁溝中に小ピットを10基以上検出している。当初大壁住居の可能性も考えたが、他の壁溝中には見られないため、性格は不明である。北壁中央にカマドを持つ。遺存状態が悪く、構造等を明らかにすることはできなかった。床面ではピットを検出しているが、柱穴となるかは不明



第11図 5-2 トレンチ実測図

である。

住居内からは須恵器の杯・壺蓋・横瓶、土師器の甕が床面に密着して出土している。須恵器は住居の南半部に集中している。土師器は住居の中央東寄りとカマド内から甕が出土している。また、炭化した編み物も出土している。時期は、7世紀第二四半期のものと考えられる。

竪穴式住居SH502 5-2 トレンチ東部で検出した竪穴式住居である。住居の東半はトレンチ外に出るため全容はわからないが、南北3.8m、残存高約0.2mを測る。北壁に沿うように須恵器の甕が出土している。

土壇SK503・SK504・SK505 直線的に並ぶ3基の土壇である。遺構検出段階では、溝と認識して掘削を行ったが、底面が立ち上がり、溝ではないことがわかった。SK503からは須恵器の皿の蓋と高坏が、SK504からは土師器の甕が、SK505からは土師器の鍋が出土している。いずれも土壇底からはやや浮いた状態で出土している。これらの3基の土壇は、配置から見るとそれぞれ関連を持ったものと考えられるが、性格は不明である。



第12図 SH501 (南から)



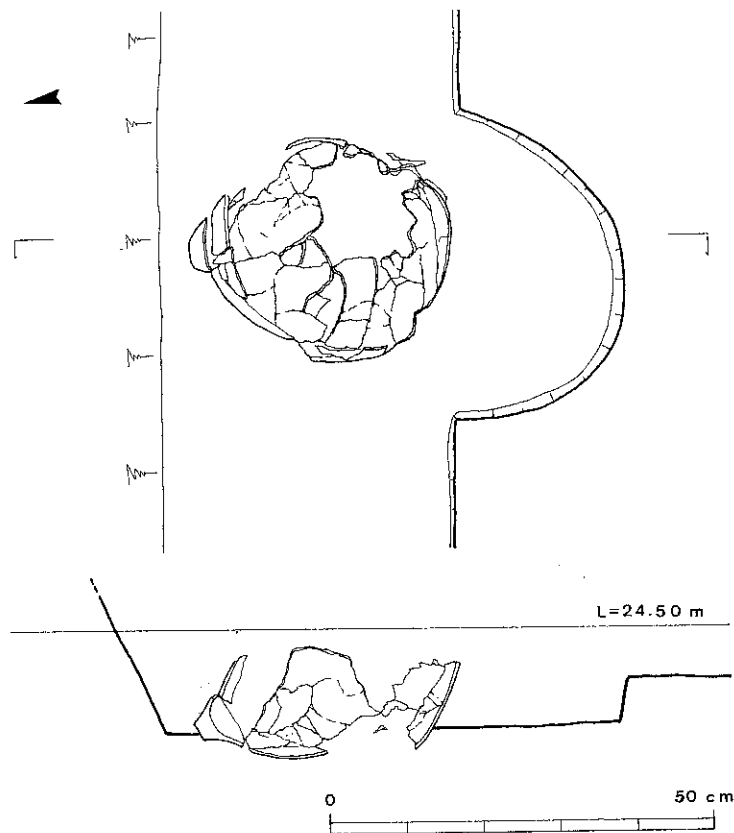
第13図 5-2 トレンチ (北から)

D 7トレンチの遺構 (第9図)

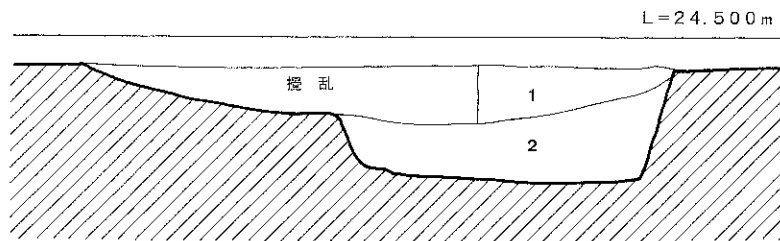
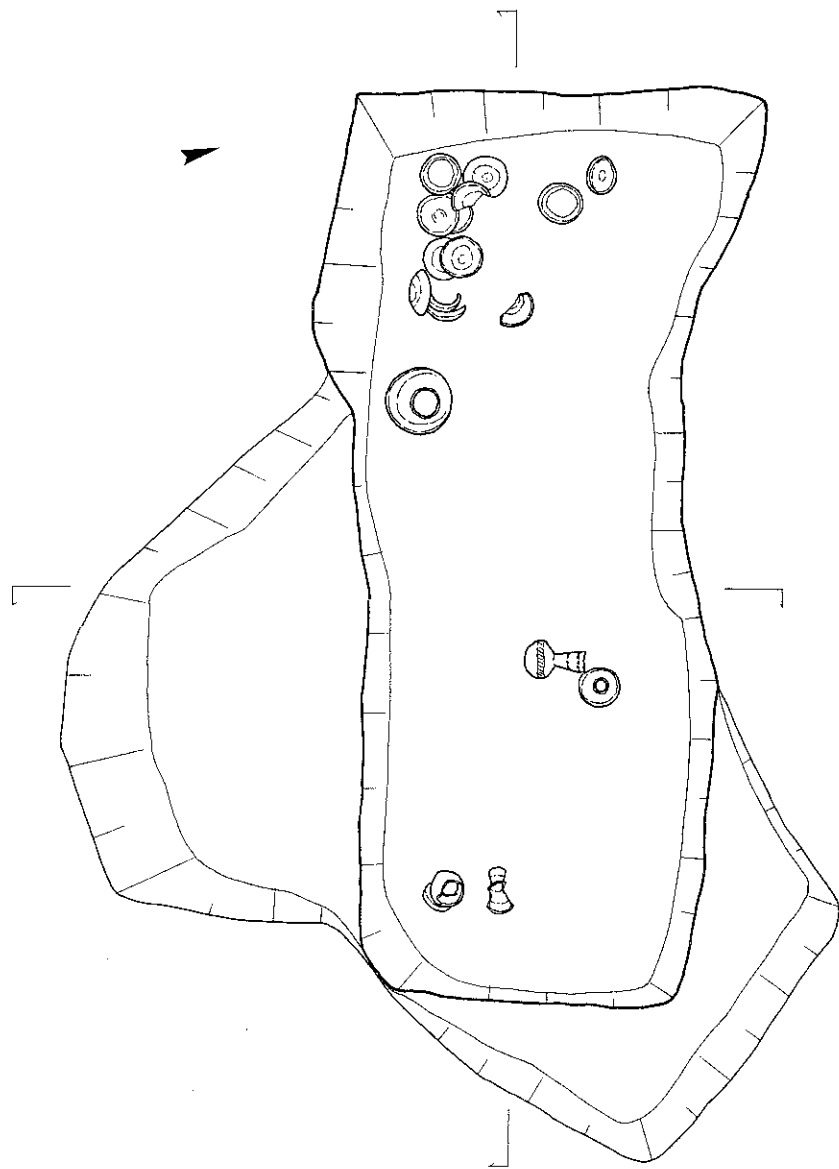
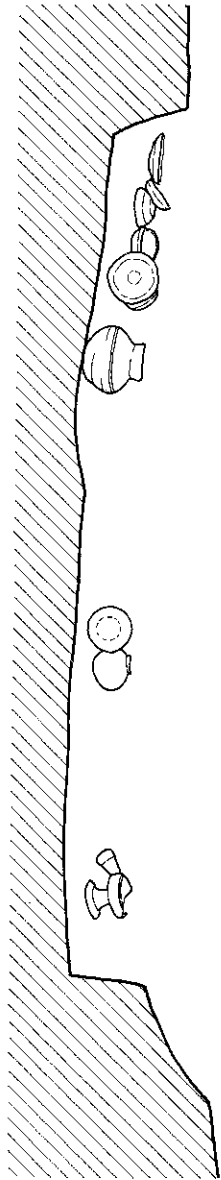
7トレンチは調査地中央部にある東西方向のトレンチである。このトレンチは茶畑の土壌改良のための攪乱をほぼ全面にわたって受けており、遺構面に達する掘削も多い。トレンチ実測図における方形の掘りかたは、ほとんど攪乱によるものである。

ここでは縄文時代晩期の土器棺、古墳時代後期の土壇墓、溝などを検出している。後に述べる9トレンチの状況とも合致するが、縄文時代の遺構はすべて上部を削平された状態で検出している。土層断面によって検討をすると、遺構検出面の直上には、奈良時代から中世の土器を含む包含層があり、土壌改良による攪乱によって削られたものではないことが明らかである。これと比較して、古墳時代後期の土壇SK701は、遺構の遺存状態が良好で、大きく削平を受けたものとは考えられない。このことから類推すると、縄文時代から古墳時代後期の間、付近一帯の表土が大規模に削られた可能性が高いものと考えられる。

土壇SK702 (第14図) トレンチ東部で検出した、縄文時代の土壇である。壺形土器が倒れ



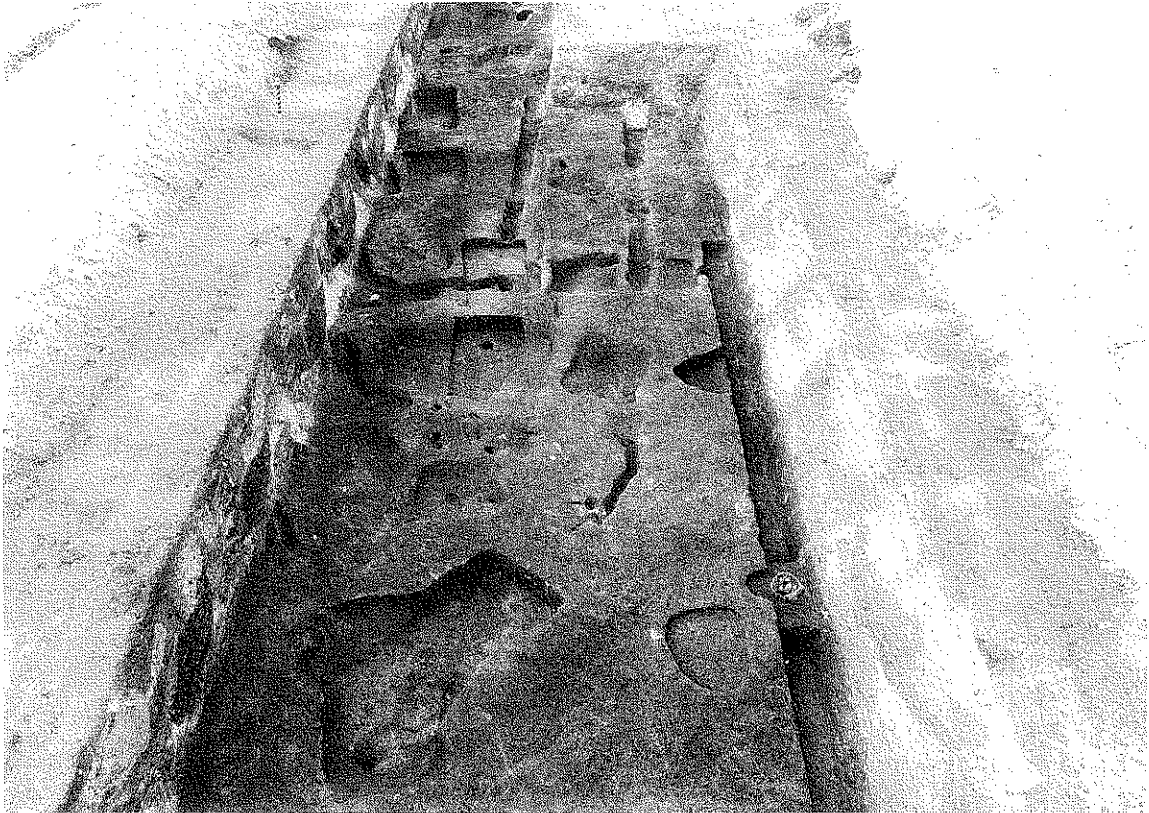
第14図 SK702縄文土器出土状況



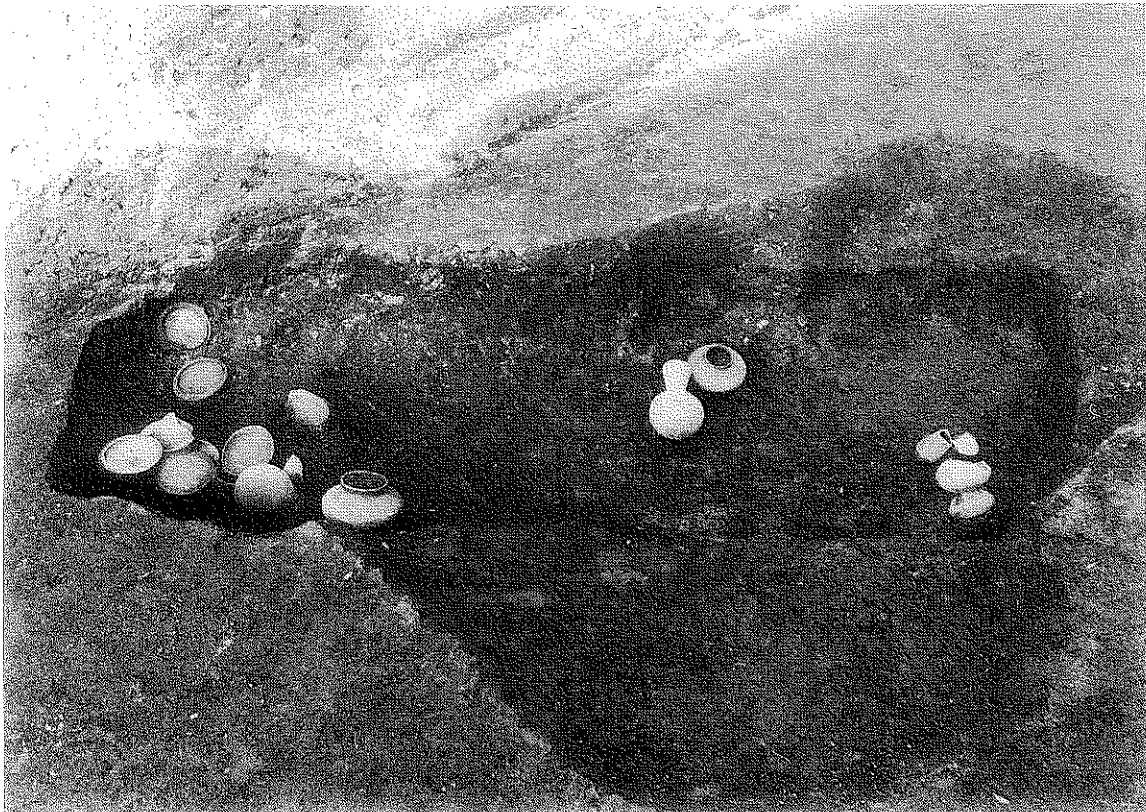
1. 黄褐色土
2. 暗褐色土



第15图 SK701实测图



第16図 7トレンチ完掘状況（東から）



第17図 SK701全景（南から）



第18図 SK701土器出土状態（東から）



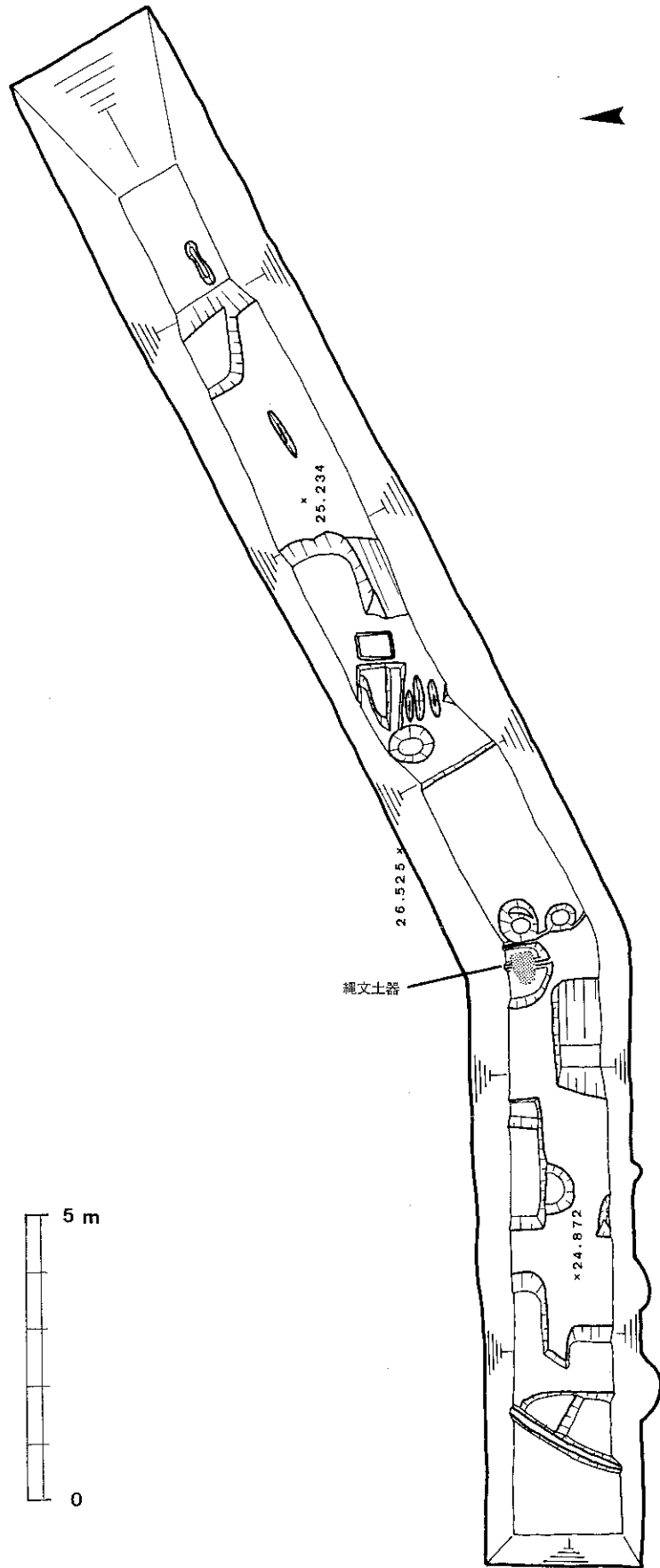
第19図 9トレンチ全景（西から）

た状態で単独で1点出土した。口頸部を削平されているが、ほぼ完形のものであり、土器棺と判断した。遺構は、上層の包含層を取り除いた段階で土器の破片を確認した。掘りかたがあるものと思われるが、明確な土質の変化を確認できなかった。

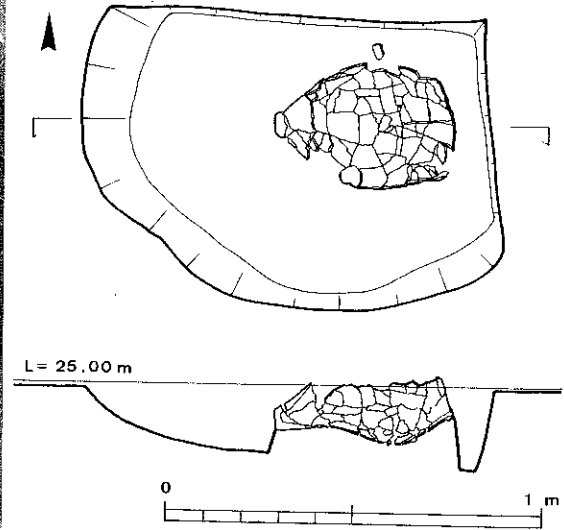
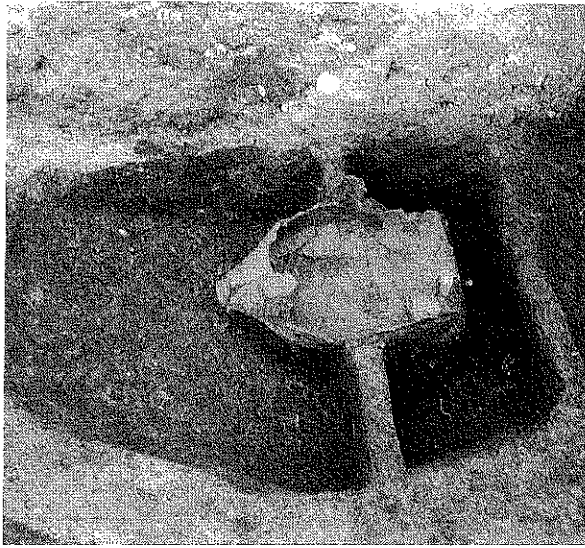
土壌SK701(第15図) SK 702の南で検出した東西方向を主軸とした土壌である。長方形を呈しており、長さ2.35m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。中からは完形の須恵器15点が出土し、土壌墓と考えられる。

土器は土壌西端に杯身6点、杯蓋6点がまとめられており、すぐ東側に短頸壺が1点、土壌中央に短頸壺と長頸壺が各1点、東端に台付長頸壺が1点置かれていた。第15図では杯類が浮いた状態で書かれているが、これは土壌西端に柵状の施設があったのかもしれない。土器はTK 209型式のものである。

溝SD703 トレンチ中央で検出した南北方向の溝である。当初SK702と関連させて、古墳の周溝となる可能性を考えたが、溝の幅も細く、別の遺構と考えた方がよいだろう。



第20図 9 トレンチ平面実測図



第21図 SK901縄文土器出土状況

E 9トレンチの遺構（第20図）

9トレンチは、調査地中央にある東西方向のトレンチである。ここでは土壌・溝などを検出しているが、性格の特定できる遺構は少ない。

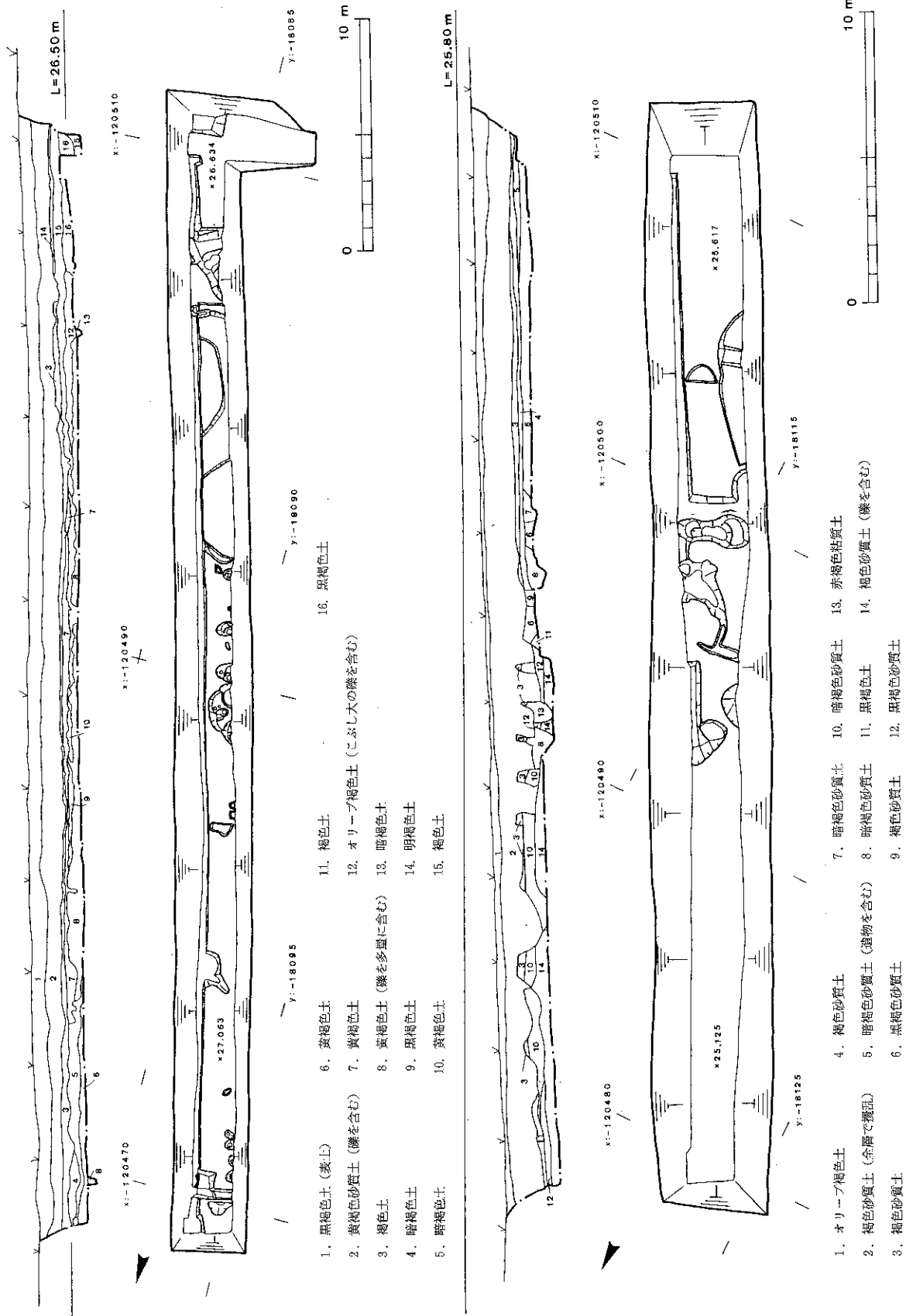
土壌SK901（第21図）

SK702同様、土器を検出したため発見できた土壌である。ここでも土壌状に掘削を行っているが、明確な掘りかたは明らかにできなかった。ここでも、縄文時代晩期の深鉢形土器1点が、上面を削られた状態で出土している。この土器も削られた面以外は完形であるため、土器棺と判断した。

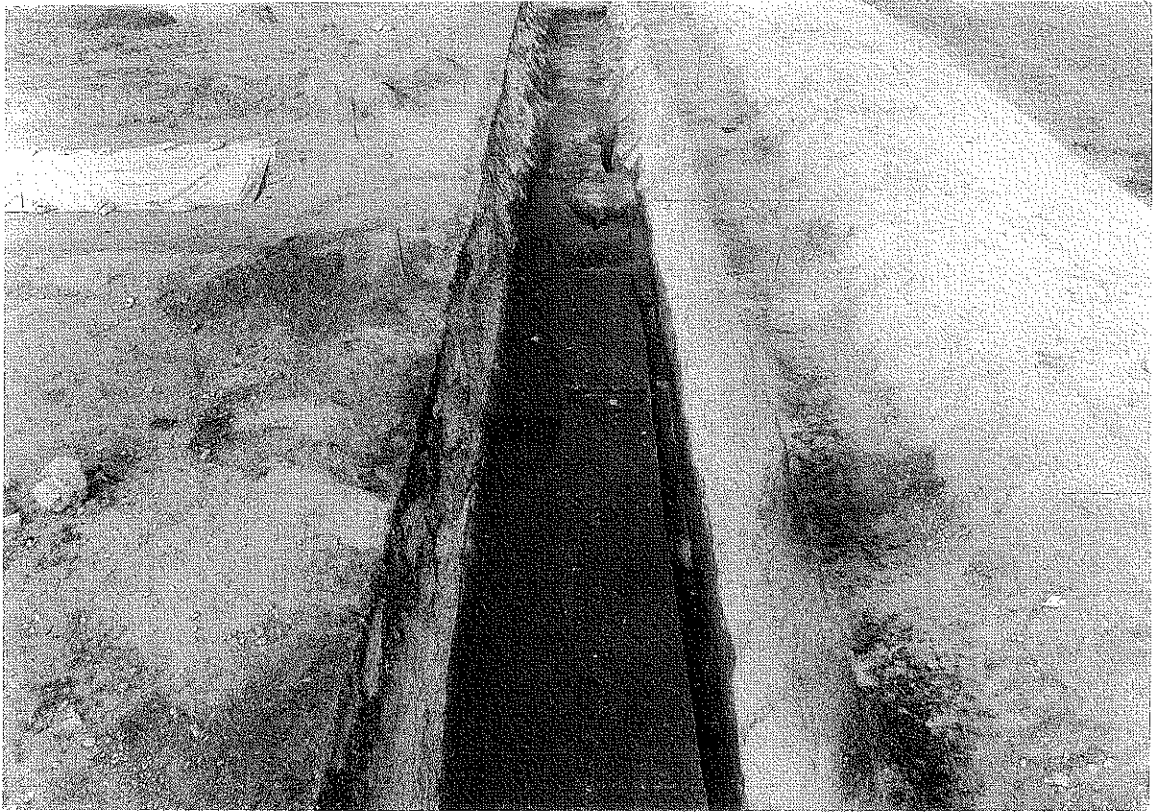
F 10・11トレンチの遺構（第22図）

調査地東部の南北方向のトレンチである。このトレンチでは、弥陀次郎川の氾濫によるものと思われる砂やシルト、礫の互層が厚く堆積している。先にも述べたように、弥陀次郎川は万福寺の造営が行われた江戸時代前期には、10・11トレンチの南側にある市道付近を流れていたことがわかっている。ここで注目したいのが、調査地北辺で検出した旧流路周辺では、このような大規模な氾濫層が認められないことである。このことは南山城における小河川が天井川化することと符合しており、江戸時代前期を中心とする時期に、大規模な木の伐採などが行われ、山が荒廃していた状況を推測することができる。

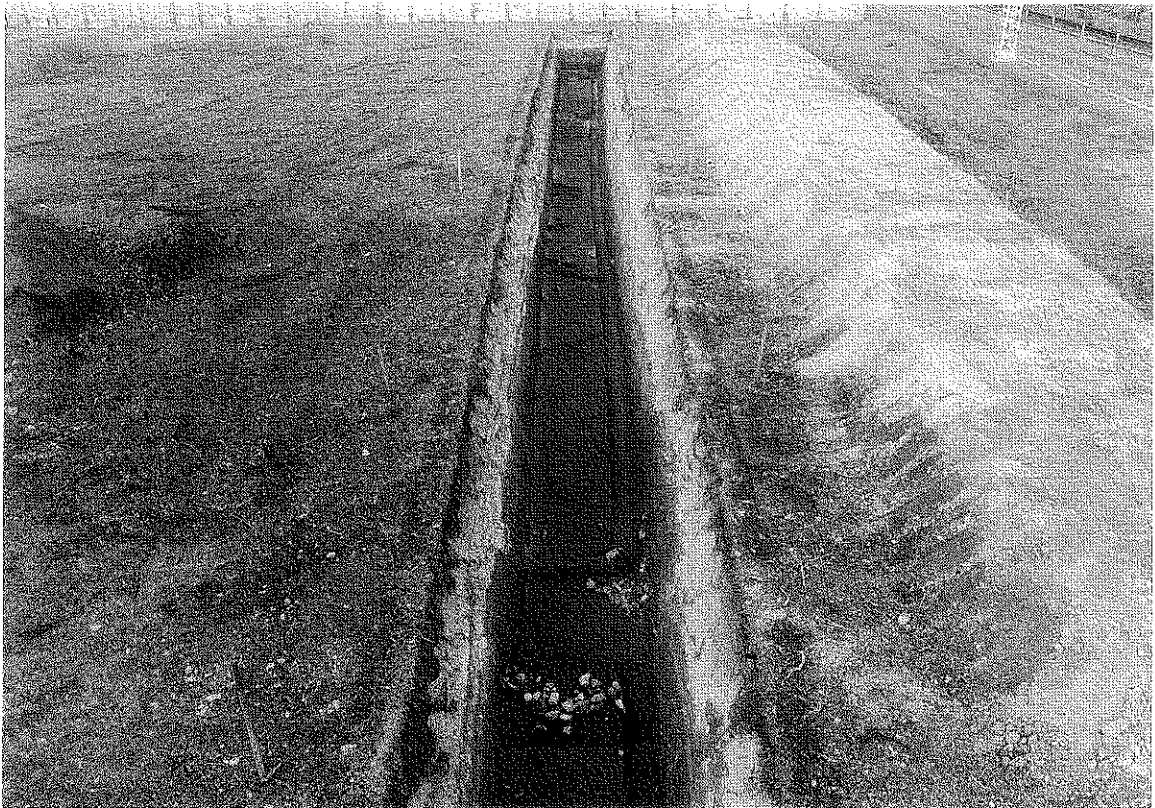
10・11トレンチでは、溝や土壌、礫の集積などの遺構を検出した。しかしそれぞれの遺構内からの出土遺物が少なく、性格を特定できる遺構はほとんどなかった。傾向としては10トレンチでは奈良時代を中心とした遺物が包含層から多く出土しており、調査地東部に当該期の遺構が存在する可能性がある。



第22図 11・10トレンチ実測図



第23図 10トレンチ完掘状態（南から）



第24図 11トレンチ完掘状態（南から）

4. 出土遺物

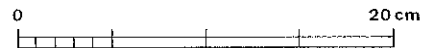
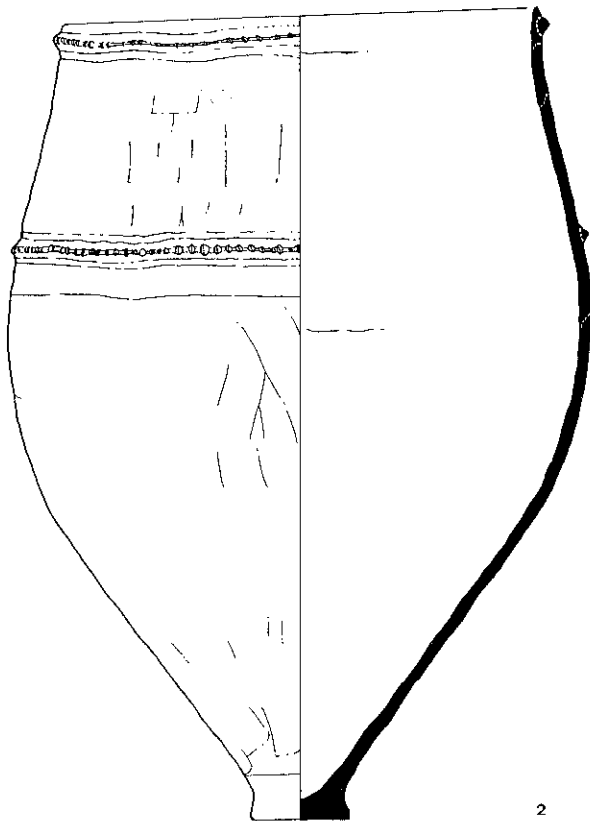
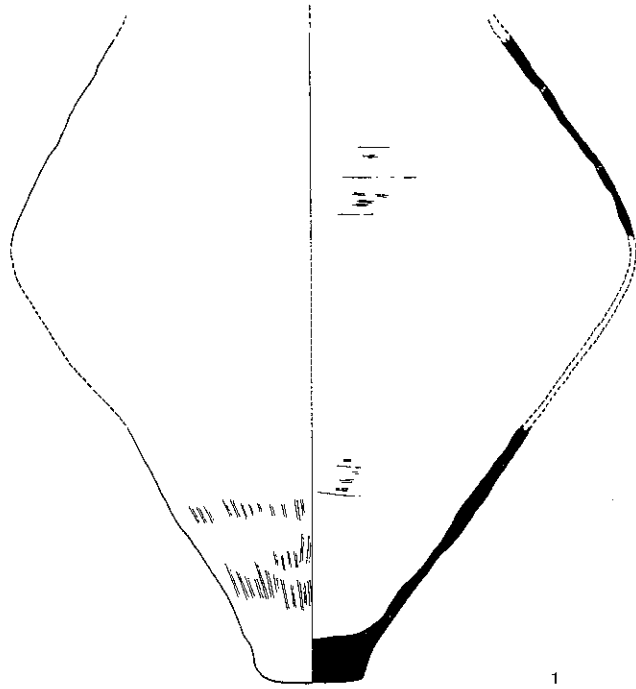
今回の調査で出土した遺物は、整理箱20箱分になる。時代的には縄文時代晩期、弥生時代前期、古墳時代前期、後期、奈良時代、中世と様々な時代のものがある。

A SK702出土土器（第25図1）

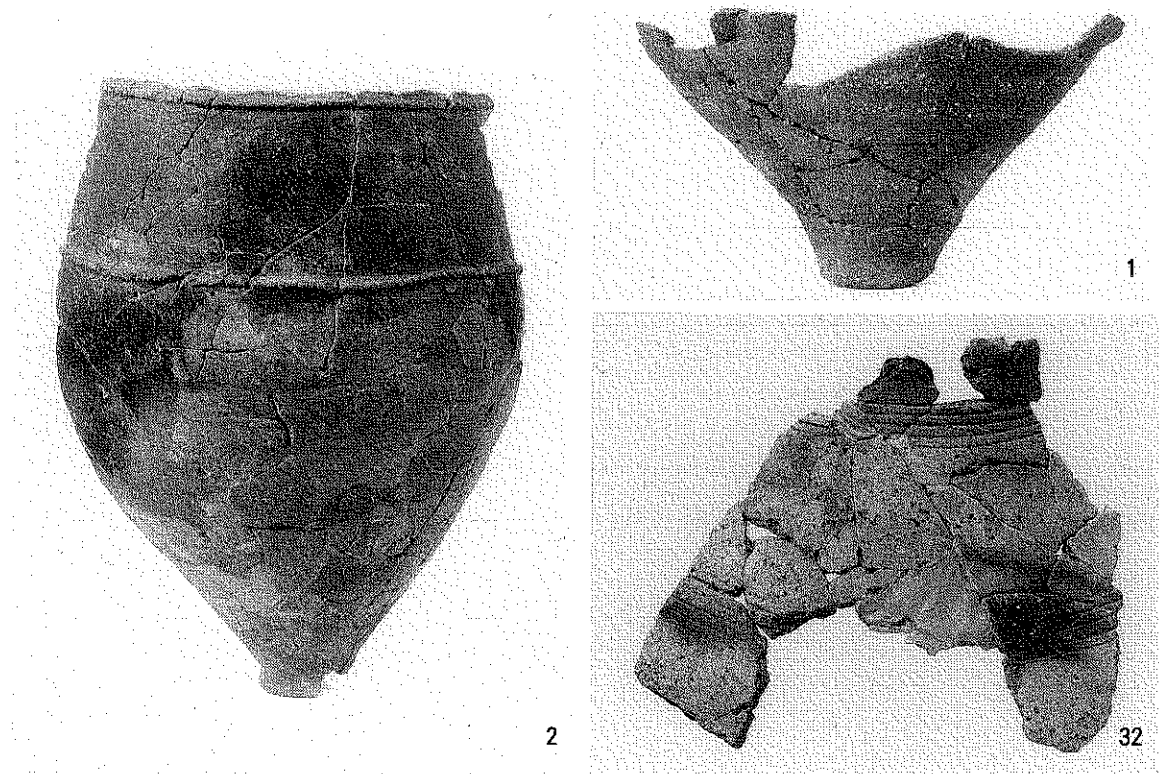
壺形土器である。底部は平底であるが緩やかな丸みを帯び、器壁は厚い。端部は外方に張り出さない。体部外面は、底部付近が縦方向のナデを施す。明瞭ではないが、条痕が残る。体部中央はケズリを施す。体部内面は明確ではないが、横方向の板ナデを行っている可能性が高い。口縁端部がないため突帯の有無が不明だが、長原式か。

B SK901出土土器（第25図2）

深鉢形土器である。突帯は、口縁端部よりやや下がった位置と胴部最大径に貼付ける。刻目はD字である。口縁端部の面取りは行っていない。形態は、口縁部はわずかに外反するが、胴部には明確な屈曲は見られない。底部は平底で、外方に張り出す。体部内外面はナデを施す。突帯の貼付け位置から判断すると、舟橋式の様相を示すが、胴部の屈曲が見られない点などからは長原式の様相も認められる。舟橋式から長原式への過渡的な段階か。



第25図 縄文土器実測図



第26図 縄文・弥生土器

C SK701出土土器 (第27～29図)

SK701からは、須恵器の杯身6点、杯蓋6点、台付長頸壺1点、長頸壺1点、短頸壺2点が出土している。杯類の法量はほぼ同じで、身の口径は10.5～11cm、蓋の口径は12.5cm前後である。天井部外面、及び外底面は全てヘラケズリを施す。3には焼成時に溶着した別個体の須恵器片が付着している。

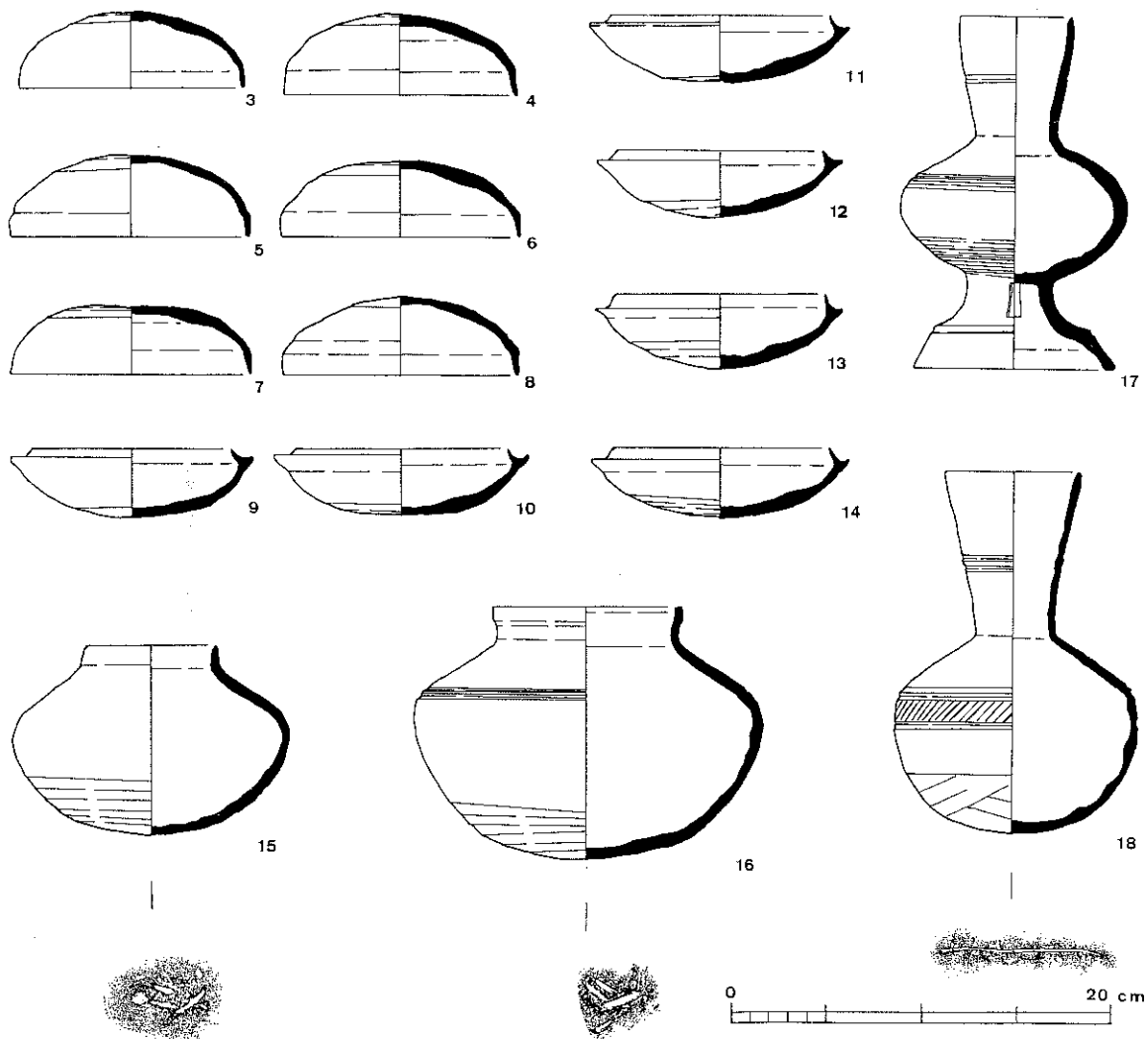
台付長頸壺は脚部に2方向の透かしを持つ。底部外面はヘラケズリの後カキ目、肩の最大径から上部の沈線までの間にもカキ目を施す。内湾気味の口径部の中程には1条の沈線を持ち、沈線より上部にもカキ目を施す。内底面には半円形の工具により粘土を削った痕跡がある。

長頸壺は、わずかに屈曲する肩部を持ち、屈曲部に2条その下方に1条の沈線を施し、その間をヘラ状工具による斜め方向の刺突で充填する。底部は横ナデの後、ハケ状工具によるケズリを行う。底部には「一」のヘラ記号を持つ。

短頸壺は大型のものと小型のもの2点がある。他の土器と異なり、焼成が甘い。外底面はヘラケズリ。大型のものにのみ肩部に2条の沈線を施す。これらの土器の底部には「一」の同じヘラ記号をがある。

D SH501出土土器 (第30・31図)

SH501からは須恵器の杯、壺蓋、平瓶、土師器の甕などが出土している。須恵器は住居の



第27図 SK701出土遺物実測図

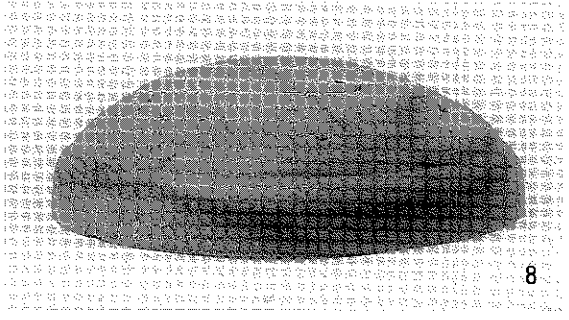
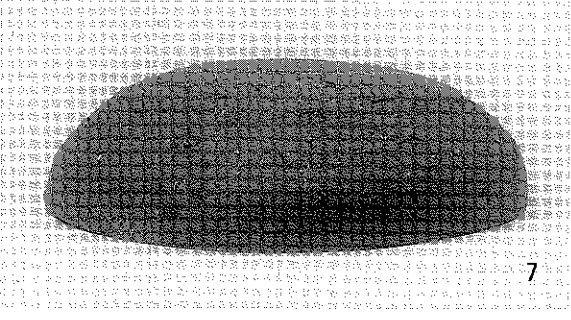
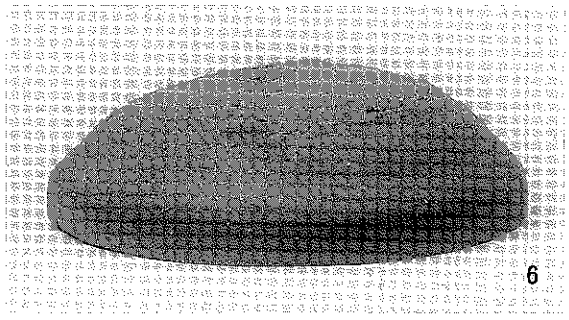
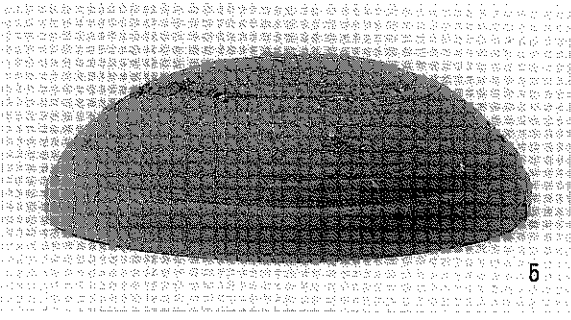
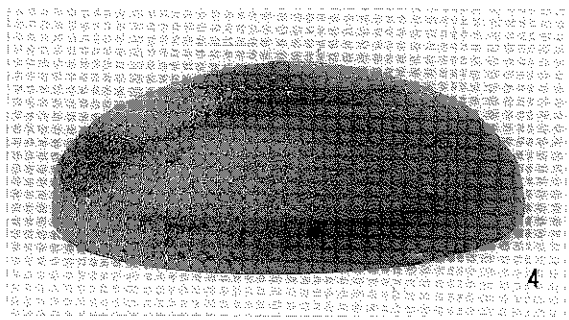
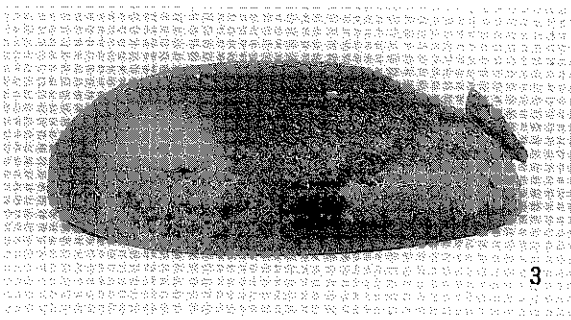
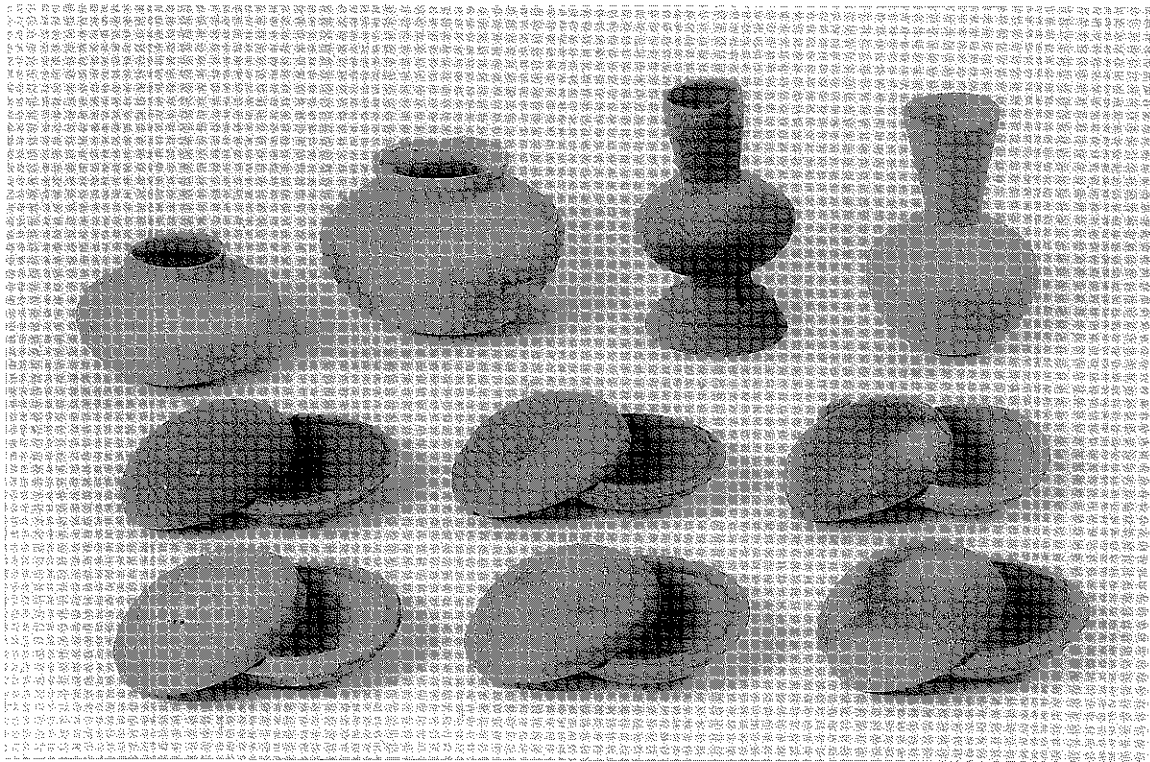
南東部にまとまった状態で出土しており、土師器は住居中央の東よりとカマドの2ヶ所集中が見られた。

須恵器の杯には杯Hと杯Gの2種類がある。杯Hの身は、口径8.4~10cmで、外底面はロクロから切り離れた後未調整である。蓋は1点のみの出土であるが、口径は9.8cm。杯Gは、蓋が1点出土したのみである。口径11.2cm。天井部はヘラケズリを施し、宝珠つまみを付す。壺蓋は、形態的には杯Hの蓋に類似するが、口縁端部に平坦な面をつくり、天井部はヘラケズリを施す。平瓶は肩の強く張らない丸い体部を持つ。土師器の甕は、いずれも長胴の甕で、内湾気味の口縁を持つ。

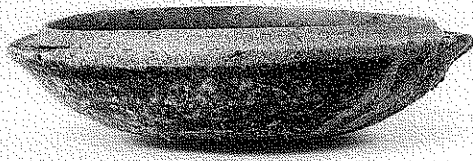
須恵器の杯の特徴は、^{註8)} 隼上り瓦窯出土の土器とよく類似しており、隼上り第3段階、飛鳥Ⅱの段階にあたるものである。

E その他の土器 (第32~34図)

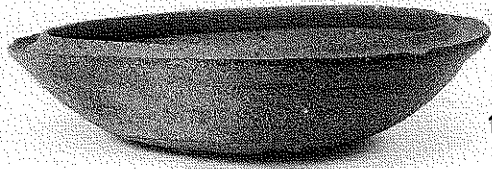
第32図はその他の遺構・包含層から出土した土器である。前述した時代のもの以外に、弥



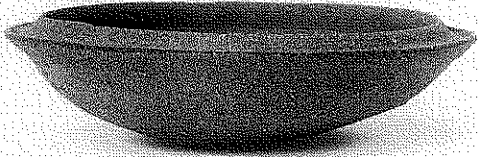
第28图 SK701出土遺物 (1)



9



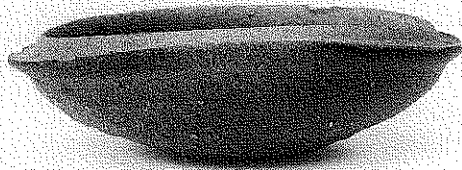
10



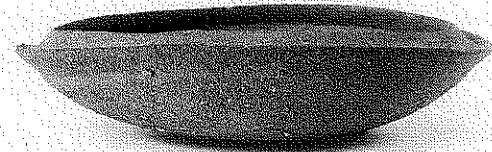
12



11



13



14



17



18

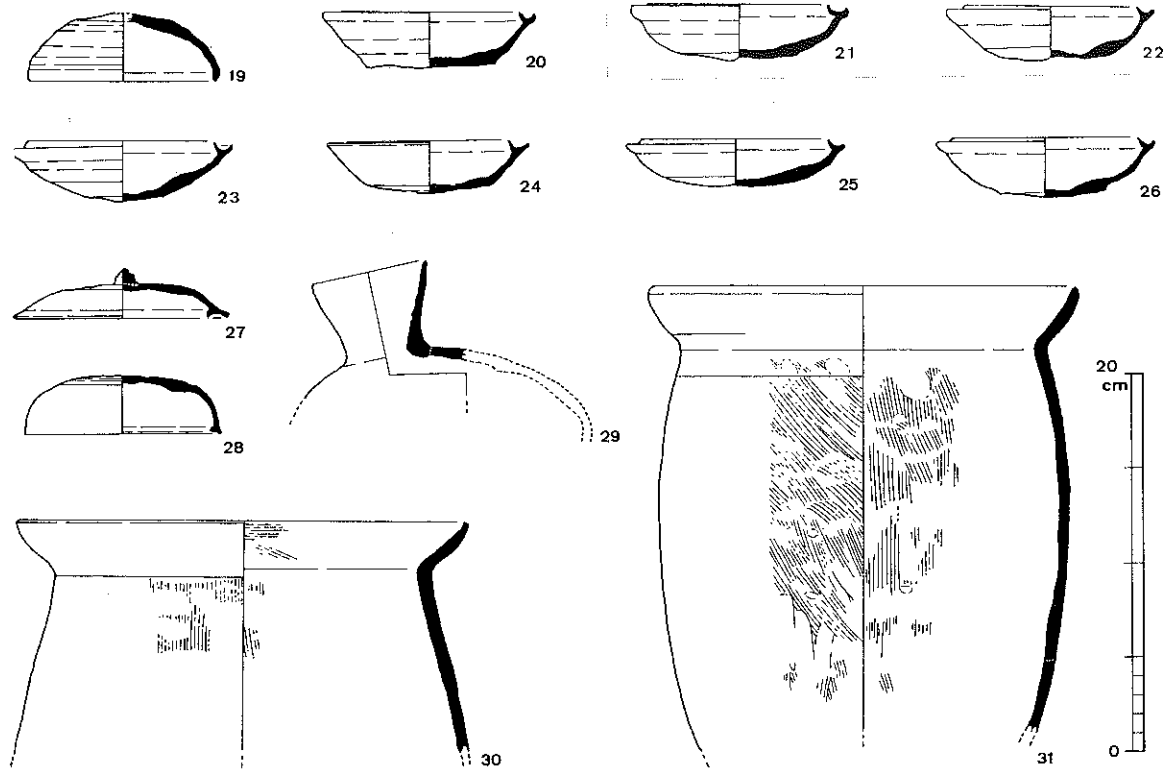


15



16

第29图 SK701出土遺物 (2)



第30図 SH501出土遺物実測図

生時代から中世のものまでである。

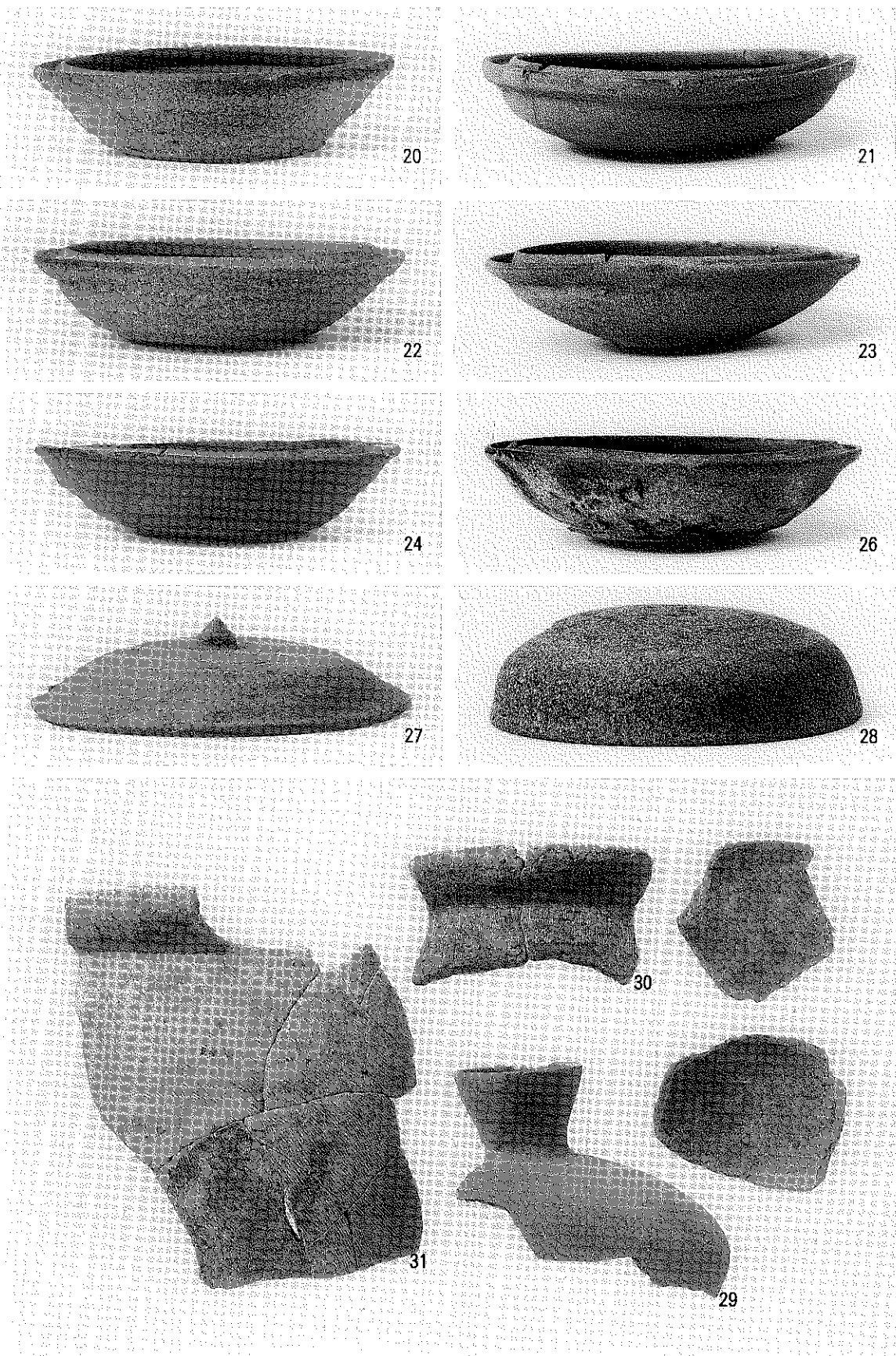
32は弥生時代前期の壺である。頸部と肩部に5条のヘラ描き沈線を持つ。10トレンチ包含層の出土である。

33は布留式の甕である。1トレンチの河川堆積層からの出土である。今回の調査で出土した布留式の土器は、そのほとんどが調査地北辺の旧流路中から出土している。ローリングを受けているものも見られるが、摩滅の少ない土器もある。今回の調査では遺構は検出しなかったが、付近に古墳時代前期の遺構も存在するものと思われる。

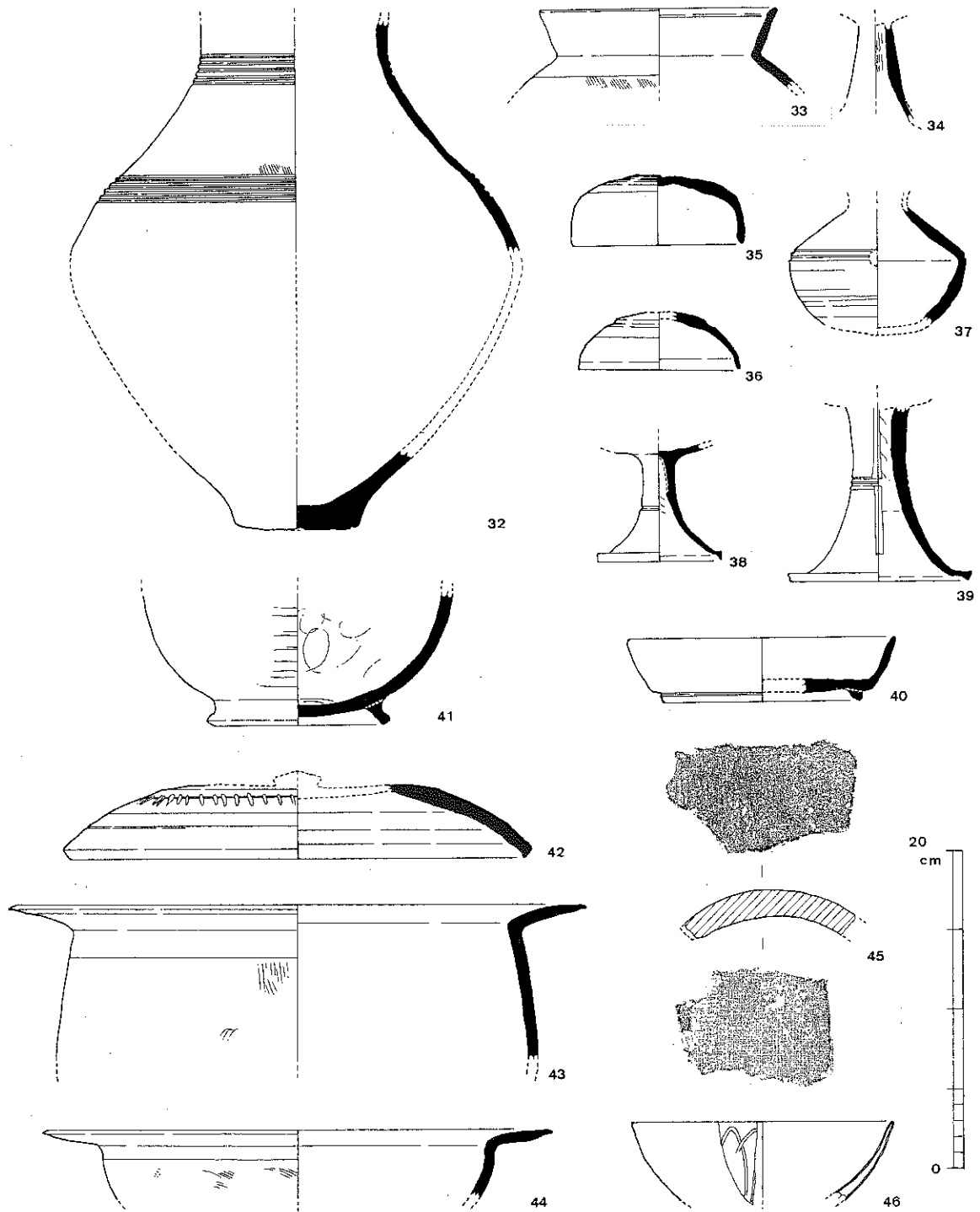
35は須恵器であるが、明確な器種はわからない。何らかの蓋のように図示したが、逆転して椀となる可能性もある。天井部のヘラケズリの単位が細かく、陶邑編年のⅡ期前半にあたる時期と思われる。3トレンチ包含層からの出土。

39は長脚二段透かしの高坏である。7トレンチ包含層からの出土。40・41は10トレンチ包含層から出土した土器である。40は須恵器の杯Bで、口径16.5cm。41は土師器の鉢である。球形の体部を持ち、外側に踏ん張る高台を付す。外面はケズリ、内面には螺旋暗文を施す。

38・42はSK503出土の土器である。38は小型の高坏である。脚部中央に1条の沈線を施す。42は皿蓋である。天井部に、放射状にヘラ状工具でナデつけた跡がある。規則性はあるが、文様としての意識があったとは思えない。ヘラケズリの時に生じた凹部を埋めることを意図したものか。



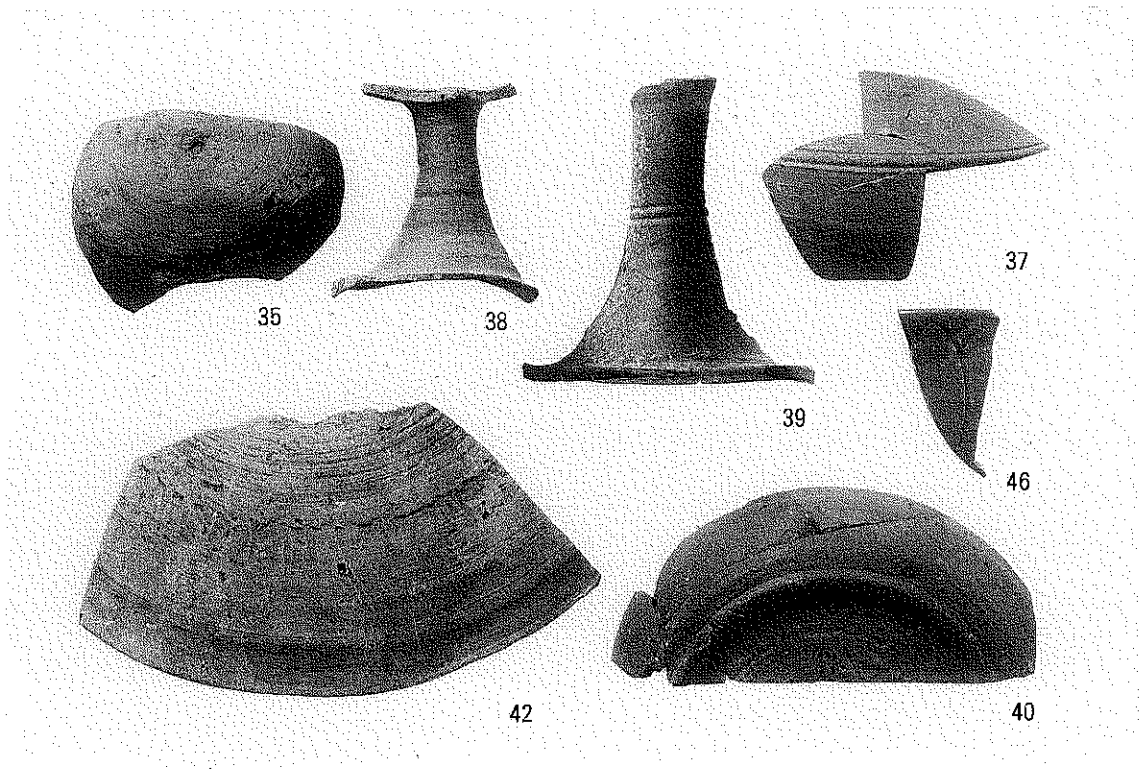
第31図 SH501出土遺物



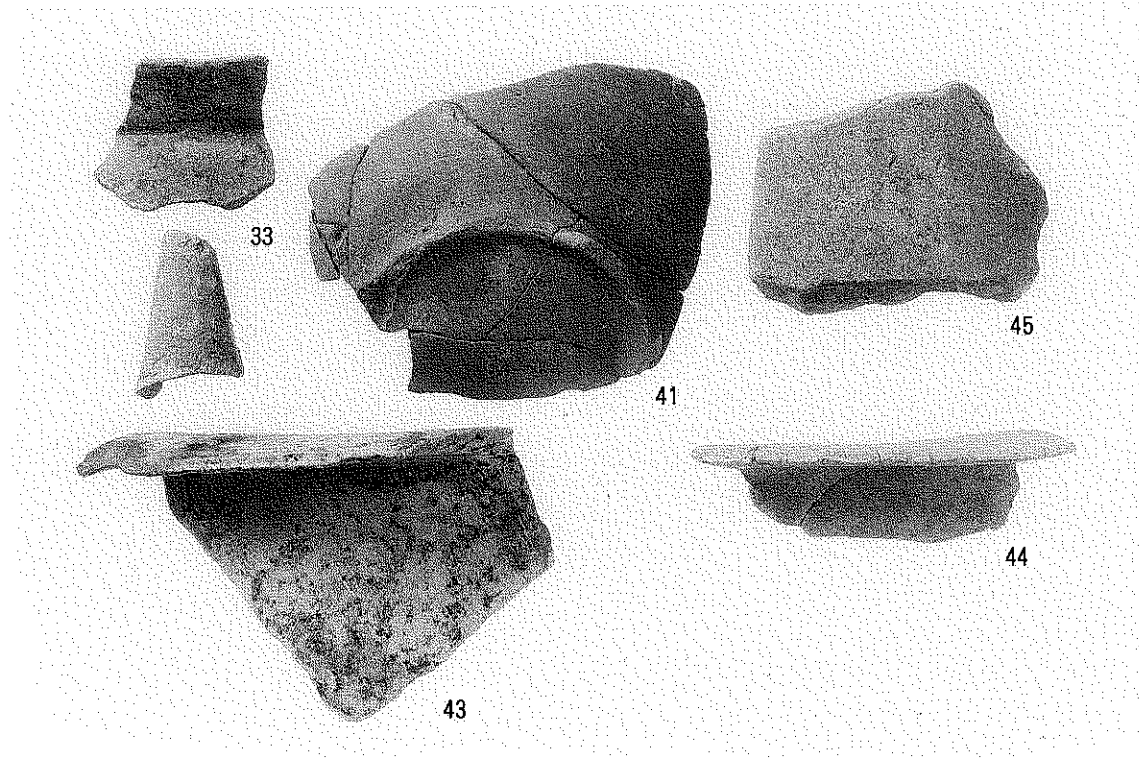
第32図 その他の出土遺物実測図

43はSK504出土の甕である。大きく屈曲して横に広がる口縁を持つ。44はSK505出土の鍋である。口縁の形状、胎土等SK504出土の甕に類似する。

45は6トレンチ出土の丸瓦である。凸面はヘラケズリ、凹面は布目を残す。46は9トレンチ出土の青磁椀である。外面に蓮弁文を持つ。龍泉窯系。



第33図 その他の出土遺物 (1)



第34図 その他の出土遺物 (2)

5. ま と め

今回の寺界道遺跡の調査では、縄文時代晩期から奈良時代にかけての遺構を検出した。これらは、昭和60年度の調査成果と合致し、寺界道遺跡の集落の広がりを示すものであろう。昭和60年度の1次調査では、縄文時代晩期の貯蔵穴、古墳時代後期の竪穴式住居跡、奈良時代の掘建柱建物を検出しているのに対して、奈良時代の遺構については明確ではないものの、本調査でのこれらの時期の遺構は墓である。つまり縄文時代晩期、古墳時代後期の寺界道遺跡は、集落域を南に、墓域を北側に配していたことが類推できる。飛鳥時代の竪穴住居跡については、1次調査でも遺物は出土しており、集落の中心部が移動していたことも考えられる。

また、今回の調査で注目されたのは、本調査地と二子塚古墳との関係であった。前方部南側に広がる本調査地には、二子塚古墳に関係する何らかの遺構が発見される可能性を予想していたが、調査の結果、古墳の時期の遺構は全く発見されなかった。しかし、縄文時代晩期のSK702・SK901と古墳時代後期のSK701の検出状況から、これらが営まれた間の時期に地表が大きく削平を受けたことが推測された。これらの状況から判断すると、二子塚古墳の盛土として、調査地の土が使われたことが考えられる。事実、二子塚古墳の盛土には、調査地の広い範囲で検出した黒色土が使われている。二子塚古墳の築造にあたっては、古墳周辺の土をすきとって、盛土を行っていたことが推測されるのである。調査地内で弥生時代前期や古墳時代前期の土器が出土するにもかかわらず、遺構が発見できなかったことは、それを裏付けるものと思われる。また、1トレンチの状況などから判断すると、古墳のすぐ南を流れる弥陀次郎川に対しても、氾濫や浸食を防ぐ何らかの土木工事を行っていた可能性が考えられる。

今回の調査で、明確な遺構を検出したのは調査地の南側に限られる。つまり、古墳から一定の範囲内には利用されていない土地が広がっていたことが考えられる。このことは、二子塚古墳の隔絶性をさらに際立たせることになったのではないだろうか。

(註)

- 1) 「五ヶ庄二子塚古墳」『宇治市文化財調査報告』第3冊 1992 宇治市教育委員会
- 2) 「寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 1987宇治市教育委員会
- 3) 「西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第21集 1993 宇治市教育委員会
- 4) 「岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 1987宇治市教育委員会
- 5) 「瓦塚古墳発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第11集 1988 宇治市教育委員会

6) 註1 文献

- 7) 京都フィッシュントラック株式会社に委託して火山灰抽出分析を行った。その結果黒ボク層でアカホヤ火山ガラスの濃集がその下層で始良火山ガラスの濃集が認められた。しかし火山ガラスの含有率が低いため、この層を降灰層と認定するのは困難である。橋本清一氏の教示によれば、アカホヤ火山灰を起源として発達した草原が腐食したものであるという。なお、丹波地域の黒ボク層については、中川和哉氏の論考（「丹波地域の遺構検出面と黒ボク層」『京都府埋蔵文化財情報』第75号 2000 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）があり、寺界道遺跡の状況とよく符合する。
- 8) 「隼上り瓦窯跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第3集 1983 宇治市教育委員会

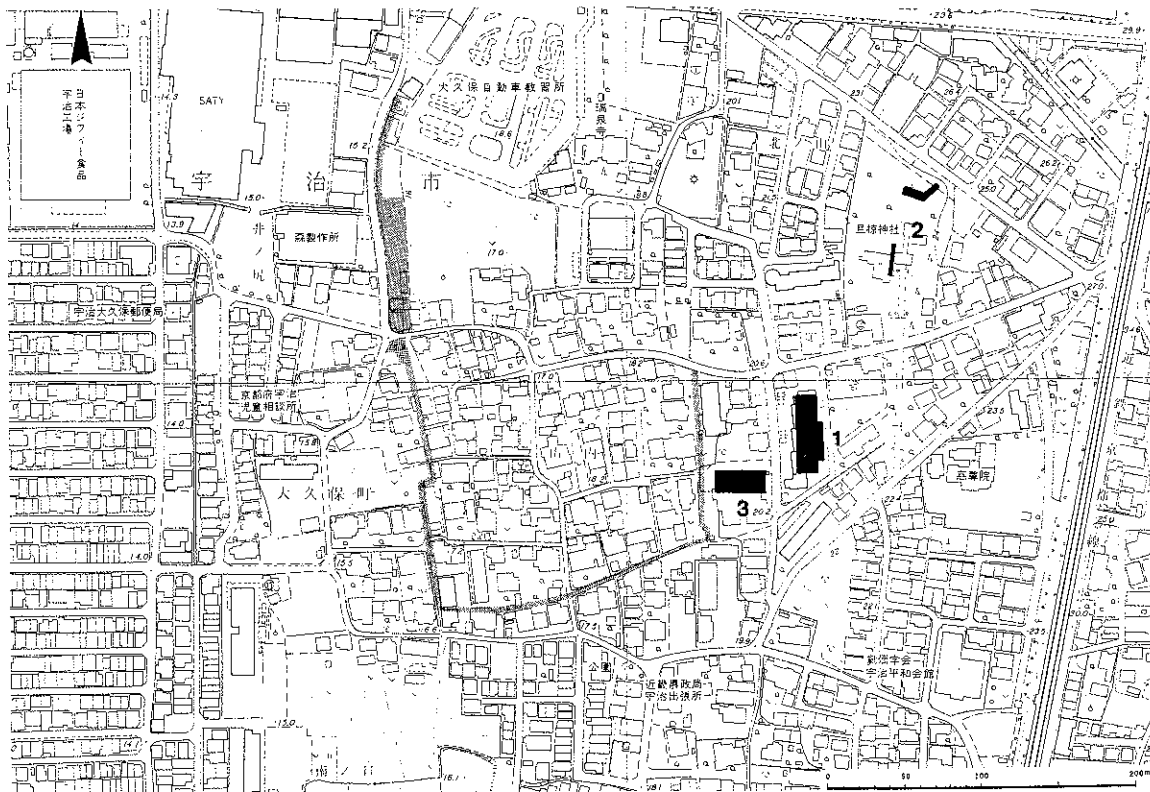
Ⅱ 旦棕遺跡発掘調査概要

1. はじめに

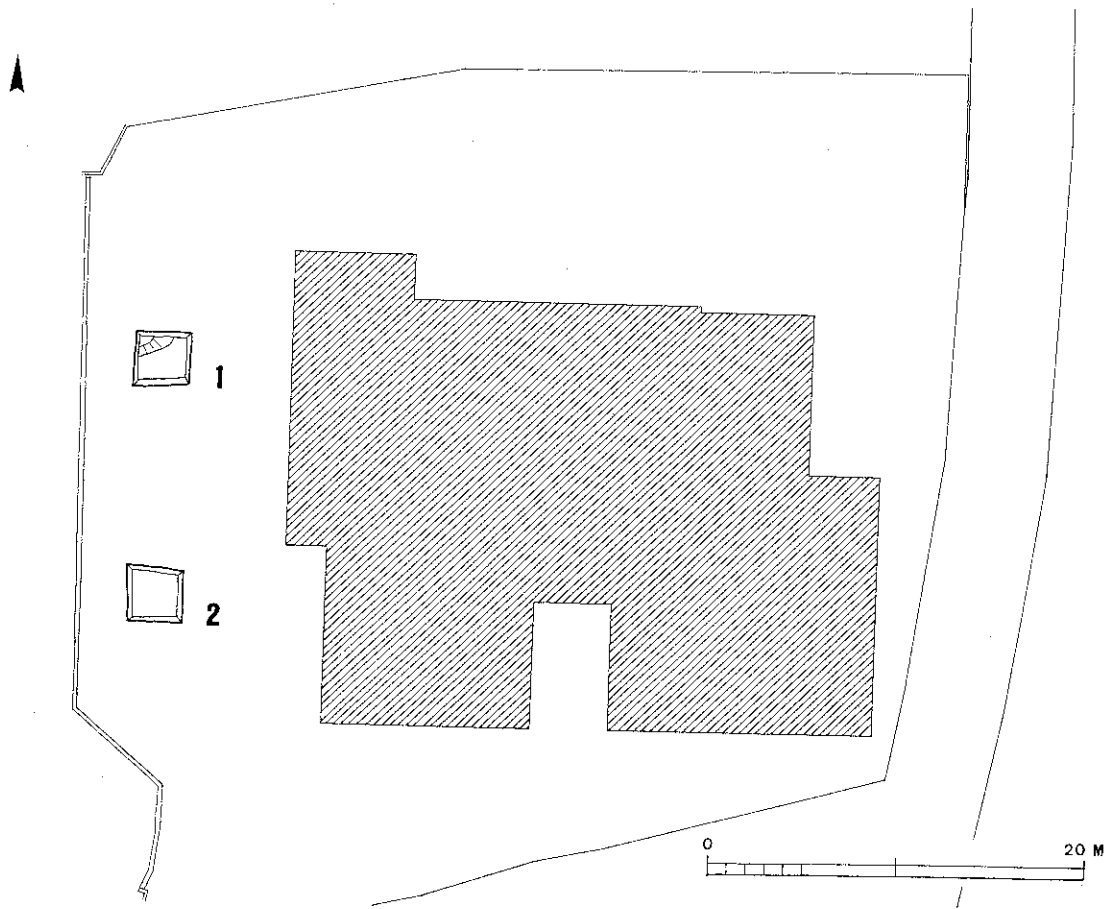
今回の調査は、やましる健康医療生活協同組合の診療所増築に伴う発掘調査である。本調査地は、平成5年度に診療所建設に伴って発掘調査（旦棕遺跡3次調査）を実施しており、その際13世紀後半から14世紀前半の大規模な鑄造遺構を検出している。『宇治市史』によれば、本調査地の西側の境界にある水路を大久保環濠集落の東限としており、この鑄造遺構は環濠集落に付設された鑄造工房であることが考えられた。また調査地の東に隣接する地点で1次調査が、北東の旦棕神社境内で2次調査が行われている。1次調査では削平された後期古墳や飛鳥・奈良時代の集落を検出している。2次調査が行われた旦棕神社は式内社であるが、本来は西方の大久保町旦棕にあったといわれており、現在の旦棕神社社地には大久保村の村社である栗隈天神社があったとされている。この神社名から、『延喜式』に記載される栗隈郷はこの付近に比定されている。この2次調査では顕著な遺構は検出していないものの、古墳時代から中世に至る遺物が出土している。

今回の増築部分は既設建物の西側にあたり、鑄造遺跡関連の遺構もしくは環濠の一部が検出される可能性が考えられた。

なお調査面積は18㎡、調査期間は平成12年11月20日から11月21日の2日間である。



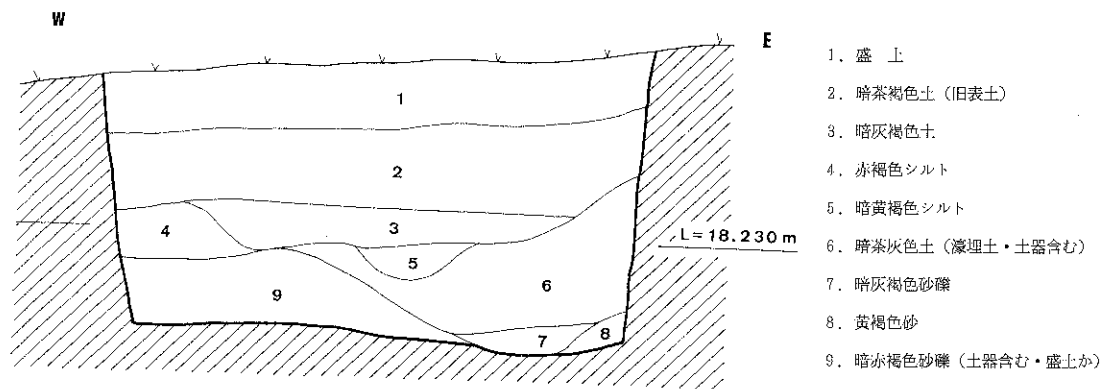
第35図 調査地位置図（アミ目部分は宇治市史の環濠復元図による）



第36図 トレンチ配置図

2. 調査の概要

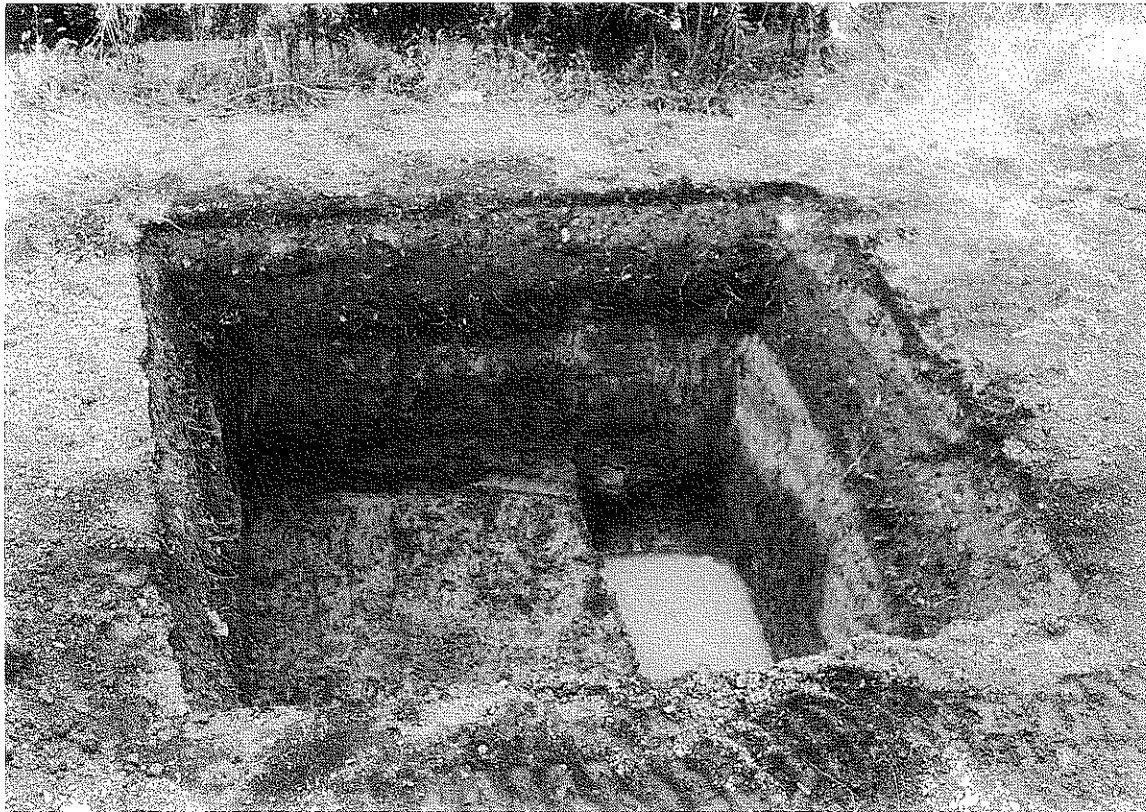
調査は3 m四方のトレンチを増築部分の南北2ヶ所に設定して実施した。層位はまず①表土及び診療所建築後の盛土、②診療所建築前の旧表土、③灰褐色もしくは黄褐色系のシルト、④暗茶灰色土がある(第37図)。遺物が含まれているのは④層で、水分を多く含む溝の埋



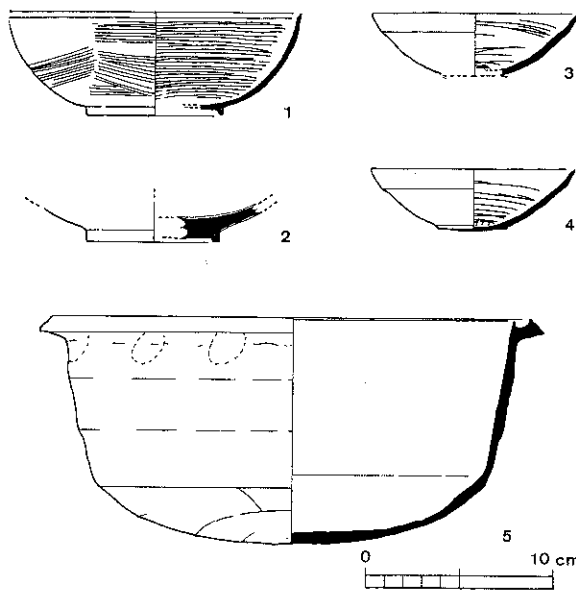
第37図 1トレンチ北壁断面図



第38図 1 トレンチ全景（東から）



第39図 2 トレンチ全景（東から）



第40図 出土遺物実測図

土の様相を呈している。3層は地山である黄褐色粘質土に起因したもので、埋め立てられたものである可能性が考えられる。地下水位は高く、約1.8mほど掘削すると湧水が見られる。

調査の結果、2トレンチでは全面でほぼ上記の土層が確認され、部分的に地表約3mまで掘り下げたが、湧水のためそこで掘削を断念した。1トレンチではトレンチ北西隅で赤褐色シルト、および暗赤褐色砂礫層の堆積を確認した。これらの層中からは土器が出土しているため、地山ではないことが明らかである。

おそらく人為的に盛土されたものと思われる。トレンチ北東隅では黄褐色の砂質土が立ち上がる状況を見せている。

今回の調査では整理箱1箱程度の遺物が出土している。出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・瓦質土器・鉄滓・ふいごの羽口がある(第40図)。時期的には、奈良時代から中世までのものを含む。これらの遺物のうち5点を図示した。1は黒色土器A類の椀である。断面がやや細長い三角形の高台を付す。2は緑釉陶器の皿である。硬質のもので、貼り付け高台を持つ。近江系緑釉陶器か。3・4は瓦器椀である。わずかに粘土を貼り付けて高台とするが形骸化しており、その突出は1mm程度である。大和型、第Ⅲ段階E型式。5は瓦質の鍋である。受部は胴部から外折し、さらにその上に粘土を付して口縁とする。底部と胴部の境には稜を持つ。

これらの遺物の下限は、14世紀前半の時期であり、3次調査の鋳造遺構の時期と合致する。また3次調査で出土していない平安時代の遺物を含んでいるが、当該期の遺物は2次調査地からも出土しており、亘棕遺跡の継続性を示すものかもしれない。

3. ま と め

今回の調査では、明確な遺構は検出していないが、3次調査の遺構の検出面より低いレベルまで掘り下げているにもかかわらず、地山層を確認できないことから判断すると、大規模な遺構の中にトレンチが設定されていることが考えられる。さらに南北に並んだ2ヶ所のトレンチで同じような土層の状況を示すことから、南北方向の濠であると想定するのが妥当で

はないかと考える。

宇治市内の環濠集落に関しては、これまで発掘調査によって確認された例はなく、すべて歴史地理的な手法によって想定されたものである。今回の調査は面積も小さく、不十分なものであることは否めないが、中世の環濠集落の実態を明らかにする一つのあゆみであると考ええる。

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらかいどういせき・あさくらいせきはくつちょうさがいほう							
書名	寺界道遺跡・旦椋遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	荒川 史							
編集機関	宇治市教育委員会							
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
寺界道遺跡	京都府宇治市五ヶ庄大林	26204	54	34° 54' 49"	135° 47' 30"	990920 ～ 000224	1,700 m ²	宅地造成
旦椋遺跡	京都府宇治市大久保町山ノ内	26204	145	34° 52' 3"	135° 46' 18"	001120 ～ 001121	18 m ²	診療所増築
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
寺界道遺跡	集落	縄文時代晩期 古墳時代後期 飛鳥～奈良時代	土壇墓・竪穴式住居	縄文式土器・須恵器・土師器				
旦椋遺跡	集落・生産遺跡	室町時代	濠か	瓦器・瓦質土器・緑釉陶器・ 黒色土器・ふいご羽口・鉄滓				

宇治市街遺跡発掘調査概報

－ 第51集 －

発行日：平成13年3月31日

発行者：宇治市教育委員会

〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地

印刷：新進堂印刷所

